

## 終章 明治維新と園芸文化

エリザ・R・シドモアは明治十七年から来日して、近代化を迎えた日本の景色を見ました。彼女は、江戸から東京へ変化した町を「模造品の山」と捉え、大きな失望を感じます。しかし町の片鱗に江戸の面影を見付けることにより、美しい日本を見出して行きます。彼女の視点は、序章で外国人が見た江戸の景色と同じように、現代人の私たちを明治初頭の東京へ誘ってくれます。第一節では、シドモアの記録のほか、維新期の大きな変化を、小澤圭次郎が著した「明治庭園記」から多く採録しました。小澤の記す、維新以後に江戸の園芸文化に起こった大きな変化は、シドモアが感じたように私たちを大きく失望させます。

第二節では、文明開化が起こした大きな変化が江戸以来の花名所に与えた影響を見ていきます。その変化の一つは鉄道です。鉄道は人々を遠くへ連れて行くことを容易にしました。それは花名所が郊外へ拡がることを意味します。徒歩圏内での花名所よりも、汽車に乗る喜びと花名所を巡る合わせ技は人々にとってはより魅力的なものに見えたでしょう。また、電力の導入が園芸界にもたらした変化も大きく、例えば、菊人形に電気応用の大仕掛を施した興行が行われるようになると、浅草花屋敷などや団子坂で行われていた古くからの菊人形には人が集まらなくなりました。浅草花屋敷は境内地であったことから、地所の所有権が寺から東京府へ移り、地代や店賃の徴収、借地料の値上げに苦しんでいたところへの文明の利器がもたらした大きな打撃でした。

第三節では、すでに江戸時代から始まっていた、植物を通しての海外との交流を見ていきます。植物を通しての交流は、お互いに品種を増やしていくことで、園芸の世界を豊かにし始めていました。プラントハンターであるロバート・フォーチュンが特に入手に力を入れた、日本のアオキの雄株の西洋への紹介は、雌株しかなかった西洋に赤い実を結ばせる結果を生みだします。特に国益を目的とした万国博覧会などでは、日本の庭園や園芸種を多く紹介するように努力が図られました。外国まで枯らさずに植物を持ち出すことの困難や、現地との気候の差で、なかなか成功には至りませんでした。しかし、幕末から西洋の草花が日本へも次々と上陸を果たし、日本からは百合、花菖蒲、朝顔や楓などが盛んに輸出されるようになります。園芸文化の交流は国内にとどまらず世界への拡がりを見せるようになります。

### 第一節 旧武家地のたどる道

#### 216 江戸時代の遺物

『シドモア日本紀行』  
エリザ・R・シドモア 著  
明治二十四年（一八九二）

#### 江戸の面影

初めて目に入る東京の風景は、横浜の最初の風景と同様、旅行者

をがっかりさせます。銀座、この商業地区のメイン通りは、「新橋」鉄道駅の反対側にある橋から始まって、東海道の北端・日本橋へまっすぐ延びています。日本橋は全国距離測定交通原点です。道路の大部分に、外国を手本にした月並の建物、縁石、緑陰が並んでいます。その道を鉄道馬車「馬車鉄」がブー音を響かせ、軽乗合馬車がガラガラ走るので、街の風景をかなり不調和にしています。これは観光客の夢見た大江戸ではなく、まして東洋の大都會でもありません。漆喰壁、木造円柱、ぎらつく店の飾り窓、けばけばしい模造品の山、このありさまに観光客はすっかり面食らいます。しかし、大都市特有の秘密の場所がたくさんあって、時代の変化とは無縁の予期せぬ掘出物が見つかり、当初の失望感を償うに足る純日本的な宝物が手に入ります。

江戸城濠が東京の中心部を通り、螺旋形に広く巻き付いています。最も内側の環状濠が皇居を囲み、さらに運河の枝々が外郭河川へ達し、また封建時代、将軍はこの環状濠内を占有し、そこから外側環状濠までは広大な大名屋敷がありました。楼門や濠の角はそれぞれ櫓で守られ、区域全体が堅固な陣地でした。日本中の大名が江戸に屋敷を構え、各大名は隔年交替で六カ月間暮らすことを余儀なくされ、万一戦争が起きた場合は将軍への忠義の証として自分の家族を人質として置きました。東海道など主要街道は、いつもこのような大名行列でにぎわい、参勤交代は日本の全階層を活気づけ、旅行や遠足への願望を高めました。天皇が京都から移り、東京を首都と定めた際、将軍の居城は天皇の住まいとなりました。将軍の全財産は天皇へ奉還され、大名屋敷は新政府利用のため没収されまし

た。封建時代、大長方形の大名屋敷は兵舎に囲まれ、外壁を構築して小さな濠をめぐらし、さらに莊重な切妻造の楼門、跳橋、裏門、見張り用の発射窓を備えていました。兵舎には大名に雇われたサムライ（軍人）が住み、また屋敷内には閤兵場、的場、重臣家族の住宅や雇用された職人の長屋がありました。

新政府の接収により、たくさんの屋敷が徹底的に破壊されて庭園となったり、強制的に外国様式の庁舎に建て替えられたりしました。いくつかの大名屋敷は兵舎として残り、黒い礎石に白壁の単調な眺めは、封建時代の街並風景を彷彿とさせます。他の屋敷は、もつと下品な使われ方をし、墮落した看板が白壁で揺れています。

昔、江戸の風流人は橋の上で、青緑の堅い蓮床から頭を出し一面に咲くピンクや白の花を眺めたものでした。最近、近代公衆衛生上の科学的見解によるマラリア撲滅と称して、真夏に三重の江戸城濠に潜む蓮床を数マイルにわたって摘み取りました。しかし、新政府のペリシテ人「実利主義者」といえども、全部の蓮を根こそぎ壊滅することはできず、江戸時代の遺物として残りました。多角形の楼門、がっしりした石垣、苔と地衣類に覆われ、内曲線で水面から反り上がる急斜面は過去の貴重な記念碑です。石垣や土手には、ねじれ曲がつて絡む樹齢数百年の松が被さっています。気味の悪い枝が荒々しく外へ飛び出し、石垣に沿って手探りにしているように見えます。内側の環状濠のあちこちに、依然として絵に描いたような白壁と黒切妻造の砦櫓があちこちにそびえ、初期の頃から城と将軍を守ってきた証となっています。

## 217 江戸城庭園の荒廃

「明治庭園記」  
小澤圭次郎 著  
大正四年（一九一五）  
関連図版70・71

江戸城本丸の内苑、並に同西丸の山里御庭、荒蕪の事、

明治改元、戊辰の年、四月四日此頃は、尚慶を以て、江戸の大城を、  
官軍の手に明渡されたり、此大城は、歴代徳川大將軍の居城にて、  
其本丸内に、一林泉有り、御座所オマシドコロの御庭と唱へ、又之を柳営内苑と  
も称せり、西丸の方にも、亦一園有り、山里の御庭と唱へて、將軍  
世子居住の後苑なり、両苑共に、最嚴密の場処なれば、近侍親臣と  
雖も、容易に拝觀を許可せられず、故に其水石花木の光景如何を、  
記述したる者、甚罕なり、園癖の酔園子が、四十有年来に、庭園  
図書を搜索の結果、漸く柳営内苑の記文八篇と、山里苑の記一篇を  
得るに過ぎず、是等記文を熟玩して、曾て断案論文を作りたれば、  
茲に抄出して、後昆をして柳営内苑の勝概一斑を、窺知らしめんこ  
とを庶幾するなり、

余曾て江戸城本丸明細図を檢閲するに、其表方には、大広間椽前  
に一庭有り、黒書院椽前に一庭あり、白書院椽前にも、亦一庭あり、  
然れ共、是等の庭は、山水の設有しに非ずして、唯多少草木を疎植  
せしのみなれば、古昔所謂前栽センザイに過ぎざるなり、其山水造の園趣  
を経営せし所は、御座所前園と、御小座敷西苑なり、其水は則ち、  
玉川上水の清泉を引注し、或は懸奔せしめて、瀑布とし、或は渟渟

せしめて、池沼とせり、山は則ち、櫨山ハシヤマ、桜山、連理山、見盤山の  
四座有りて、崢嶸の態を具へ、蜿蜒の状を設け、又別に無名の新山  
を築きて、高低互に趣を成し、向背俱に觀を異にしたる光景は、拝  
觀諸臣の記文に拠りて、之を徴知すべきなり、抑も幕府は、當時四  
海の富を併有せしゆゑに、黄金を鏤刻して、楼台を粧飾し、白銀を  
延張して、橋梁を構築するも、只応に其意の如くなるべし、区々た  
る仮山盆地を造設するに於てか、何か有らんや、況んや文恭公  
十一代は、其在職五十年の久きに及び、文政頃には、頗る奢侈に趨  
しかば、市井の風俗も、亦華靡に浸潤したる時世なりしに於てをや、  
然るに斯公が、前後の賁園を挙げば則ち、纔に吹上後苑中の小部分  
を脩治し、離館浜苑に、三五字の亭榭を経営せしと、此内苑に小補  
理を加へられしとの三者に過ぎずして、公が平生豪華を好まれし挙  
措に似ざる者は、何ぞや、曾て聞しに、寛政の初、公年少氣鋭の際  
に、近侍狎臣と嬉戯して、内苑林泉を改脩せん事を揚言せられけ  
ば、閣老吉田侯信明朝臣、松平伊豆守殿諫て曰く、將軍は、天下を以て一  
家とし、芳野山の桜花も、龍田川の楓葉も、皆是園中の景物たり、  
何ぞ新に仮山盆地を補理し給ふに及ばんやと、公之を聴て、意太だ  
不平なりければ、輔佐元老白川侯定信朝臣、松平越中守殿更に啓白せられ  
けるは、斯かる老成の言語を、弱年の伊豆守の口より発するに至ら  
しめたる者は、是臣が罪過にして、輔弼の責追る可らずと、公是に  
於てか、造園の挙を断念して、文武の道を修め給ひしとぞ、顧ふに  
此一諫は、公が台池鳥獸の樂をして、畢生其得意満志の期に達する  
を得ざらしめたる者と謂ふ可きなり、其故は、是より後、寛政五年  
三月、公初て大納言尾張侯の別業戸山莊に臨遊有しが、其境域曠敞、

林泉瑰麗にして、殿館堂塔の輪奐たる、園亭橋梁、古駅楼等の華潔富宏なるを覽て、大に激賞を加へて、凡そ天下の園池は、当に此莊を以て、第一と為すべしとの賛歎を發せられ、爾後、春秋の佳候をトして、放鷹に托して、屢ば戸山莊に臨駕有し毎に、其山水景物を愛して、忘歸の興に乘じ給しと云へれば、浜苑及び吹上苑の如きは、縦令改脩を施すと雖も、尾侯別業の右に出づ可き者に非ざる事を覺知せられて、後年聊か浜、吹上、両苑中に小經營を行はれしに止たり、是其当初の一諫を、深く銘心せられて、林泉の爲めに、敢て大土切を興起するの举措有るに至らざりしなり、否ざれば則ち、公の豁達の氣象、豪華の嗜尚を以て、争でか麼麼瑣屑の經營を施すのみにて、甘心せらるるべけんや、蓋し文政度の内苑脩理は、公が暮年の兒戲たるに過ぎざるなり、然りと雖も、巍々堂々たる、金城湯池の内面に於て、玉泉を引きて、彩舟を浮べ、花山を築きて、蒼溟を望むの景物を拈出せられたるは、寔に園池の爲めに、吐氣揚眉するに足れりと謂ふ可きなり而て文政九年脩理より、十九年後、弘化元年五月、本丸焼失し、十五年後の安政六年十月、又焼失し、四年の後、文久三年十一月、又復焼失したれども、焼失後は、直に再建ありて、内苑も亦脩理を加へられけり、然るに文久以来、国家益多難に際して、復た園池を顧慮するに暇あらず、自然荒蕪に傾きつゝ、慶応四年戊辰四月に及びて、遂に園主を變換し、大に涼荒衰頹を窮るに至りしなり。

山里御庭は、將軍世子が、江戸城西丸居館の後苑なり、故に、本丸内苑と齊しく、嚴肅禁密の地にして、其近侍臣僚と雖も、常に觀覽を獲可らざる所なり、天保五年、春三月十日、智恩院宮尊超法親

王が、將軍世子内大臣家慶公の招待によりて、遊覽したまひし時の筆記にて、山里一覽記といふ一篇を貽伝したるのみにて、他に山里苑の光景を記取せし者は、一つも之あらざるなり、而して西丸殿館は、智恩院法親王が遊覽後、僅に三年を経て、天保九年、三月十日、焼失せり、其後十四年、嘉永五年五月、又焼失し、其後十一年、文久三年六月、又復焼失したり、然れ共、焼失後、直に再建して、山里苑も其つどつど、脩理せられし事は、いふまでも無れども、文久の焼失後は、前記本丸内苑と。同様なる形勢ゆゑに、年を逐ひて、荒れ増さり、慶応戊辰四月、大城明渡と共に、庭掛りの諸役人も、亦皆分散に歸して、此庭園の手入など、益す等閑になりゆきたりとぞ、幕府瓦解まで、同朋を勤めたる、茶坊主池田昌影といふ者、第二期の央頃に、故有て我が家に來訪せしが、談偶ま、山里苑の事に及び、其曾て目撃心印したる光景を、後日着色面に描出して、我に貽りくれたり、其図は、山里御庭菊之御茶屋図一幀、同梅之御茶屋図一幀、同梅林御腰掛図一幀、同駅亭図一幀なり、此四図に拠りて、略ぼ園景概況を想見るに足れども、斯図解文章を作り得ざる爲めに、其要領を捕捉する能はず、池田子は、昭徳公十四代家茂將軍なりに仕へて、上洛の陪從を為し、遂に幕府の世を終るまで、其職に居て、能く山里苑の事を知るものなり。

## 218 大名庭園の荒廃

「明治庭園記」  
小澤圭次郎 著  
大正四年（一九一五）

## 大名の中屋敷、下屋敷、拘屋敷、庭園破壊の事

●奥州会津藩主松平侯、中邸芝新銭座に在りて、大園池の設あり、池は潮入にて、十二景の勝概を具へたり、

○竹裡径 ○酔月岡 ○春樹堤 ○白泉橋 ○双蓮池 ○偃松嶼  
○聞潮亭 ○映雪館 ○秋香園 ○涼風舎 ○匹練瀑 ○夕照林

此他に、真水の小池二箇処ありて、水草を植え、又朝陽閣と名付たるは、御殿にて大殿造なりと云へり、朝鮮人南秋月が撰文の朝陽閣記有りし由なれ共、我未た之を見ざるなり、此邸地は、破壊後、一時野原と変ぜしが、五年壬申九月十二日、始て京浜汽車開通して、新橋停車場敷地内に入りたり、

●肥前島原藩主、松平主殿頭侯中屋敷は、芝三田二丁目に在り、鈴木白藤遊記に、園中数千歩、巨木衝天、其枝葉数十歩を蓋ふ、前には海上を一目に望み、千帆尽く牆上に浮ぶ、西は芙蓉を樹間に望む、下瞰は三田の市郎、足下に在り、景致言ふ可らず、云云、とあり、此邸上地後に、福澤雪池先生之を払下げて、慶應義塾を茲に移転し、旧園の処は学生運動場となりしと云へり、

●同侯が、目黒の下屋敷に、著名の園有り、白藤の遊記に、竹木陰深、巨石数百枚あり、山茶、辛夷、残梅、单桜、桃李、各色を争ふ、又大藤架あり、芝原高处に上れば、品海眼底に在り、千帆の影、海

面に揺曳す、云云、とあるは、文政九年三月の遊賞なり、其後、天保二年九月、再遊には、莊亭西面して、富士山一矚に入る、夕陽其右に落つ、山色如画、一点障目の物無し、加之池頭瀑声如吼、水勢猛迅、泉簾妙致不可言、巨竹数十章、其梢天を衝く、楓葉纔染、半緑半紅、尤妙なり、園中十景を、人見友元か書せる木額有り、境域約三万坪余にて、其地名を千代か崎と称す、云々、十景の目、左の如し、

○窮目楼 ○洗詩亭 ○踏雲橋 ○掬清壺 ○小崔嵬 ○大古標  
○微霰岩 ○大畜嶼 ○小畜嶼 ○玉華沼

鶴山亘卿書と記す、八分にて、胡粉を入雕たり、云々、とあり、此邸も上地後に、林泉亭楼、悉皆荒敗すとぞ、

●松岡藩侯中山備後守は、水戸家の附家老にて、上第は牛込赤城門前町に在り、下邸は高田馬場の東方、神田上水の南畔に在りて、茲に權樂園を設置せられたり、白藤の記に、園の広さ、一万五千畝にて、十五景を具へたり、○朝陽館○嘯月池○環翠亭○緑疇舎○梅花亭○寒蘆岸○觀流塢○錦圯橋○深竹径○嗽玉井○彩霞原○積素台○松濤軒○群芳圃○掄材門云々、とあり、白藤は文政五年十一月と同年四月の両度に遊覧して、見聞する所を筆記せり、此の邸林泉も亦上地と共に破壊するに至りしなり、

●駿州沼津藩主、水野出羽守忠成侯の下邸は、高田村に在りて茲に鉅麗なる林泉有りし事を、曳尾菴元龜の随筆、我衣に記載せり、文政八年の記にて、此時、羽州侯は、老中職を勤め、威權薰灼たりし事は、世上に轟きしが、此事は避けて言はずして、巧に園景を叙したり、曰く、園中広き事、言語に尽し難し、芝山の高き、泉石の清

き、亭閣の物数奇、池の広大、橋の奇構、石灯籠の大小、数を尽し形を殊にし、千草万木備らざる無し、近來迄は、大竹藪にて有しを、かく壯觀の地に開き給ふ、されば、土木の功勞によりて、都て此辺の者共も、余沢を蒙るに至るとかや、云々、と其言は簡にして、意は長く、余韻嫋嫋たりと称す可きなり、此邸も、羽州侯卒後は、漸々荒蕪に帰して、上地後は、園池形跡、全く其痕を知るべからざるに至れり、

●播州姫路藩主酒井侯、中邸は、蛸殻町稻荷堀に在りて、林泉景勝、尤美なりと云へり、此邸最初は、田沼主殿頭侯が、老中勤役中に、設置せし処にて、不貲の名石を、巨多網羅して、林泉を経営し、奢侈を窮極したりと云へり、其退職閉居に際して、此邸上地を命ぜられし時に、匆惶挙措を失ひて、奇巖美石を、池底に投棄せし由は、白藤遊記に載せたり、白藤の遊賞は、文化十二年五月なり、其後文政の中頃に、一橋府、姫路侯、桑名侯と、三家協議の末に、邸地転換の事有りて、此邸地は、桑名老侯松平樂翁公の有に帰したり、當時石灯籠、石の橋抗の水盤、九重の石の塔、其他さまざまの石類、石の井桁など、昔時賄賂の品物、現存したるを、公は惡臭の物なりとて、敢て顧み給はざりし由を、三邸転換紀事に詳載せり、樂翁公卒後に、再び酒井侯中邸に帰しけるが、維新後、上地と共に、園池全廢して、其跡は繁華の市街に變ずるに至れり、

斯様に列叙し来れば、殆ど際限なき次第に付き、最著名なる園圍の、破壊に歸せし者を一括して、之を約説すべし、薩州侯の高輪中邸に、龜岡十勝有り、詩文共に存ず、仙台侯の大崎下邸に、袖崎八景有り、儒臣大槻盤溪翁詩、数篇を存す、又絵巻物一軸あり、伊達

家に伝存せり、阿州侯の白金八町目下邸に、園池美景有り、屋代弘賢遊記存す、同侯深川海辺の下邸を、雀林莊と云ひて、柴野栗山、漢文の記を存す、雲州老侯不昧公の大碕菟喪は、公好事の心匠を以て、超凡の景物を設置せられたり、公卒後に至りて、白河樂翁公一遊有りて、其景勝を激賞せられ、扈從の画師、谷文晁に命じて、其真景を描写せしめ、絵巻物に仕立て、今尚旧藩主松平子爵の秘棄する所たり、柳澤侯駒込下邸の六義園は、八十八勝の名所を設けて、詩文、和歌、並に絵巻物存す、此園一旦荒敗して、池水涸れ、山坡崩れ、佳樹多く枯損し、名石皆搬出し去りしが、遂に三菱社長岩崎彌太郎君の所有に歸して、今や復た有数の名園と賞賛せらるるに至れり、溝口侯築地木挽町下邸に、偕樂園有り、其真景を家臣画工某に描写せしめて、絵巻物二軸として、今尚同伯爵の秘棄する所たり、江州仁正寺藩主市橋侯下邸、本所五ツ目に在りて、占風園といふ、古林泉あり、和文の記、及詩歌と、真景描写の絵巻物存す、伊勢神辺藩主本多侯、高輪下邸に、宇喜洲園在りて、蜀山人の記文存す、藤堂侯染井下邸は、大園圍にて、昔時征韓の役に、分捕の金石物夥多を、八幡祠の前庭に羅列せられ、大木躑躅、蔚然繁殖して、絶類の園景なりしに、維新後、大に其地を分割して、他に売却し、今尚同伯爵の所有に属する処に、詭形異状の石造物品を排列し有り、然れ共、昔日の半分にも足らざるなり、信州飯田藩主堀侯下邸、樂其樂園は、文政年間に、某氏廢園の地を購収して、林祭酒述齋に命じて、設景を立て、之を脩治せられし名園にして、五十六勝の景物を具備せり、天保八年に至り、林門の名儒、良齊安積信か侯の命を奉じて作りし、漢文園記あり、詳に山水、樹石、亭樹等の景物を記取

せり、此園は、幕末の頃に、作州津山藩老侯、松平。確。堂。公の菟裘に属して、四年辛未までは、確堂公茲に棲遲せられしが、其後、幾ばくも無くして、全苑を破壊し忽、田地、及畦畝に変ぜり、奥。川。棚。倉。藩主、松平。周。防。守。侯。松平也の下邸、品川在の戸越村に在りて茲に古き大園池の玉川より流水を引注せし者有り、昔時、熊本藩主細川侯の別業にて、江州琵琶湖を模造せりとぞ、其後、松平氏に帰し、一時盛栄を極めて、遂に荒蕪し、維新後、吉井友実宮内大輔の有となり、其後、彫刻家堀田瑞松に帰し、近年三井男爵の所有となれり、園の記事は、加千藤蔭の和文一篇有り、又源定保の戸越日記を存す、信州高遠藩主、内藤侯の中邸、内藤新宿に在りて、其古園を、玉川園と云ひ、十勝の景物を設けて、儒臣中根経世の漢文園記、及十勝詩篇有り、上地の頃には、此十勝も、過半荒敗に帰せり、其後、宮内省所轄となりて、新宿植物御苑と称す、下総古河藩主土井侯、駒込下邸に、古き園池有れ共、別に園名も無し、此邸は幸に上地せずして、土井家の所有たり、されど、園池は漸々荒敗に傾きて、昔時の面影を留めず、近年池は全く埋め了りて、借地となり、家屋を新築するに至れり、濃州八幡藩主、青山大膳亮侯、青山宿下邸に、林泉有りしも、別に園名無し、又記文、詩歌等、一も流伝する者無し、上地後も、其池は蛇の池と唱へて、著名なりしが、後遂に第一師団第三聯隊の兵営を経営有りて、漸々池を埋め、近年は、少許沮洳の地を余し得るのみなり、遠州横須賀藩主西尾侯、本所中之郷抱屋敷に、古き林泉あり、汐入池にて、江東に著名なり、此邸は、抱屋敷ゆゑに、上地せずして、西尾子爵の居邸たりしが、第二期、第三期に涉りて、附近の各工場製作処等、河水利用の便を以て、続々相

起り、日夜煤煙を噴出して、庭樹益枯槁し、西尾氏も遂に他に移転し、邸地林泉、悉皆荒廢せり、幸いに白藤の遊記存在するを以て、当年景勝を徴知すべし、信州須坂藩主、堀長門守侯下邸、亀戸川端に在りて、潮入の池を開き遠望の邸を築き、花木秀麗なる園あり、此長州侯は、学を好みて、和学者黒川春村を聘致して、著作に従事せしめ、扶桑名画伝を編述せられたり、其書齋を花。酒。屋。と号す、故に其藏書には、皆花酒屋文庫の印あり、維新後、此邸も荒廢に傾き、遂に附近一帯の各製作工場の浸蝕する所となり、花木の余影をも看る可らざるに至れり、然るに、春村翁の義子、故文学博士黒川真頼君の雜纂中に、花酒屋園池の記文ありて、当年景勝の全盛を追想するに足れり、

以上は、江戸大名屋敷、上地に付きて、破壊せし許多園中にて、記録残存したる、著名の者を列举する所なり、尚此外に、白河少将楽翁公が、心匠目営を以て成就したる、超凡絶群の名園にして、一時に破壊せし、築地浴恩園と、大塚六園館との、両大園の要領を略説して、以て大名の庭園破壊の結尾を完局すべし、

楽翁公の築地下邸は、約二万坪ありて、寛政の初に、幕府より賜はりし処なれば、其恩波に沐浴するの意を表して、浴恩園と命名せられたり、文化九年、公致仕して、茲に菟裘を経営せられ、又五十一勝の名所を選定して、和漢両名の雅称を下し、著名文人に囑して、景を分ち詩を作らしめ、和名の方は、幕府歌学者北村法眼季文に、和歌を詠じめらる、其目は左の如し、

和名 ○千とせの浜 漢名 松濤浜 ○千代の岩橋 石梁  
○きぬ笠柳 自然織 ○いろ香の園 魁春園

○有明のうら	○八声のはし	五夜橋
○常盤じま	○千世の長橋	棲仙橋
○かきは島	○鳩の通ひ路	蹴波缸
○にしきが島	○名ごりの島	恍然島
○はる風の池	○ささ波の谷	石苑
○うつ木の関	○月まつうら	遅月浦
○葉山のせき	○花の下みち	不言蹊
○さくらが淵	○花のかけ橋	吟花棧
○竹の細みち	○月問ふ里	嘯月廬
○東雲のうら	○たか岡山	高岡山
○しら鷺の橋	○山吹の関	金葩柵
○色音の山路	○たまもの池	賜湖
○たまもの山	○ゆかりの屋	裁霞棚
○千世の細道	○かざしの山	戴花峰
○みそぎ坂	○はつ秋の森	知秋林
○くちなし山	○口なしの崎	攢黃汀
○みなと田	○ふなやま	舫邱
○まつの小島	○あき風の池	秋風池
○千入のふち	○紅葉の下道	霜錦路
○乙女が崎	○網代がうら	漁潛
○崩れずの岸	○鳥居が崎	神門島
○やなぎが浦	○真萩が関	鹿鳴戸
○尾花の堤	○千種のその	百華園
○春しるさと		
報春郷		

以上、五十一の名所なり、此和漢両名と、詩歌を刻せし碑柱は、長二尺余、幅二寸八分四方にて、和漢両名共に、楽翁公親書なり、和歌は皆北村季文自筆にて、詩は各作者の自書なり、而て和名の裏面に和歌を刻し、漢名の裏面に詩を刻して、之を各景五十一処に、分配樹立せられしものなり、元来此園池は、寛永の昔、三代將軍の老中役稲葉美濃守侯、相州小田原城主にて、相模伊豆より、美石巨巖を取寄せて、創造せられし者なるが、其後、一橋府公の下第となり、鷹場を設置して、大に山水の景致を損傷せり、楽翁公の有となりて、漸々改修を加へ、苒々潤飾を施されしが、公が絶代の巧思と、超凡の妙案とに依りて、十数年を経る後に、山水景象は、迥然として面目を改め、四時風色は、恍乎として天造地設の觀望を成すに至りしなり、浴恩園の記録、和文、漢文、詩歌等二十六種、図画六種有り、是我か多年網羅蒐集せし所に係る、又旧桑名藩主松平子爵、秘蔵の浴恩園図記類、悉皆巻物に仕立て、十八巻を一函に納めたり、予嘗て、其明細目錄を作りたれば、茲に抄出して、以て後昆の園庭資料の参考用に供せんと欲する者なり、

一 浴恩園図記、一卷、一橋民部卿草書、浴恩園三大字、絹本、園中葉山の関に掲げられ、柴野邦彦浴恩園記、絹本栗山自書小楷、たる額字の原書なり、

谷文晁画園景、絹本着色小幀、十七図、儒臣広瀬典、浴恩園諸記、五色紙本十一幀、関思恭書、篆、隸、行、草、各体、

尾藤肇、五言絶句十二首、二洲自書、以上一卷中に張込みたり

一 浴恩園真景、乾坤二卷、星野文良画、絹本濃彩、

一 浴恩園仮名の記、一卷、楽翁公自撰、自書、

一 浴恩園名所和歌並記、一卷、和歌四十首、平戸老侯松浦静山公詠、

一 自書、和歌五十首、蓮池侯鍋島直與朝臣詠、自書、和文一篇、佐野侯堀田正敦朝臣撰、自書、以上一卷中に張込みたり、  
 一 浴恩園詩歌碑、乾坤二卷、五十一勝和名漢名、樂翁公自書、和歌五十一首、幕府歌學所預、北村季文法眼詠、自書、詩五七言古今体、合五十二首、大學頭林衡以下、五十一人、寄題自書、以上一卷中に張込みたり、  
 一 浴恩園亭樹題詠、一卷、和歌二十五首、樂翁公自詠、自書、  
 一 梅津乃浪、上下二卷、梅花写生、種類凡五十八品、  
 一 三千と世、一卷、桃花写生、種類凡三十七品、  
 一 花乃鑑、上下二卷、桜花写生、種類凡百二十三品、  
 但し梅桃桜の種類は、浴恩園所栽と、大塚春秋園所栽と、両園の分を併載せり、巻尾に、樂翁公自撰、仮名書の跋文有り、  
 一 清香譜、一卷、蓮花写生、種類凡九十余品、  
 一 衆芳園草木譜、三卷、衆芳園は、浴恩園中の千種のその即ち百華の園一名也、十かへり乃花写生、  
 二種、松本仙翁花写生、種類凡二十九品、花菖蒲写生、種類凡四十四品、薊写生、種類凡三十二品、其他珍花類数品、  
以上を一 芥子写生、種類凡十五品、薔薇写生、種類凡十四品、  
卷とす、 其他諸草木の変種異花、凡六十余品、  
以上を一 牡丹写生、種類凡二十五品、芍薬写生、種類凡八品、椿写生、種類凡四十二品、  
以上を一 卷とす、  
 一 浴恩園亭樹匾額、一卷、園中の諸亭樹に掲げられたる、匾額の文字を、双鈎臨摹して、墨本の如くに、仕立あげたる者なり、右十有八卷にて、毎巻の題籤、並に園景名勝の題名、写生花木の名称等は、悉皆樂翁公の親書なり、蓋し公の園圍に於けるや、至矣

尽矣と謂ふ可き者歟、其用意周密なること、此の如きを以て、浴恩園は、維新後、直に破壊に帰すると雖も、其園池景勝より、亭榭橋梁、花木竹石、門牆匾額に至るまで、依然として百歳後に及び、尚能く全盛時代の光景を嚴存し、後昆をして当年の面影を諦認するに余りあらしむるを得たり、三百諸侯中にて、其園池花木を、図画に録存せしめられたる者、往々之有り、然れども、和漢の両文章より、詩に、歌に、匾額文字に及ぶまで、其親蹟を悉皆巻冊に収集する事、公の如き用意を傾注せられたる者は、未だ嘗てこれ有らざるなり、公は此浴恩園の外に、更に山莊六園館を経始して、以て智水仁山の真趣を領略せられり、  
 六園館は、樂翁公が小石川大塚の抱屋敷の園中に、締構せられし館舎の名なり、此山莊は、文化の初に、旗下室賀氏某の別邸を購入し、更に隣接の百姓地を買上げ、地積總計二万余坪と云へり、公は異常超凡の心匠を以て、漸次園林を造営し、養老遺懷の游予に供せられしに、数年の後に、花木蔭を成し、竹卉叢を分ちて、四時美景を呈露するに至れり、全境を六区に大別して、春園、秋園、果園、竹園、集古園、攢勝園とし、之を総称して六園と云ひ、  
和名は、六つのその 之、と其の殿館を称して、六園館と云ひたり、此山莊の記録、和文、漢文、詩歌等十種有り、又絵図類三種有りて、当年全盛の景勝を百年後の今日に目撃するの想あらしむ、全園の地形は、上段、中段、下段の三段となりて、其中に、六園を配設せり、○集古園は、上段の地にて、塗塀を遶し、一郭を成す、塀には、古代の瓦片、数十面を塗込めたり、中央に一門有り、集古門と云ふ、古昔の遺材を集めて、之を造成し、額は、大和飛鳥寺の古材にて、公自筆の集古二大

字を刻す、欄間は、希代の彫刻にて、騎馬人物、並に雲形など、皆金箔押なり、是は明暦大火前に、水戸家の表門にて、俗に日暮門ヒツラシモンと云ひ、最も莊嚴を極めし、粧飾の余片なり、門より左に、集古庫を建て、古画類聚原本、並に集古十種の原本等を納む、門より右に、攢勝庫を建て、名所勝地の竹木にて造成せし茶器、及調度類を納む、園の中央に、高一丈一尺の人造巖あり、中腹に巖窟を設けて、六園館記を刻したる白石を嵌入し、上に磬石を懸垂す、蔦蘿之に纏絡して、宛も天然石の如し、此大巖前面の左右に、公が親書の孝経マコキョウを刻せし、運瓦を積重ね、緑銅製の筐を覆ひ、其頂に銅鑄騶虞を安置す、其西方に離れて、石造の文庫三棟と、武庫一棟を連設す、四庫の周圍に、柵有りて、銘花種類の薔薇属を纏絡せしめたり、而て每庫の前面に、小門を設く、○攢勝園は、中段の地に在りて、又一郭を成し、日本全国、名蹟勝地の草木を攢め植え、又小池を穿ちて、勝蹟の水草を栽蒔し、側に公が好みの短冊形石灯籠を建つ、東面に攢勝門を設けて、門材は総て勝地名所の竹木のみ、各其産処の地名を彫刻せり、門左右の袖は、悉く萩垣にて、古画卷に見えたる編制を取りたり、又小高処に、時雨亭を置く、奥州白河阿武隈川の埋木、及び白河名所の諸材を用ゐて、小倉山莊の時雨亭を模造せし者なり、其東に、公自撰親書の樂戒碑を建つ、長州赤間関の石材なり、側に公が好形、筑前焼花鳥風月の磁灯を立てたり、時雨亭の南面は、洪旦の芝地にて、茲に往年重任中に、拝領の海棠を主として、一円に海棠林を作られたり、○春園と秋園とは、別に区域を設けず、中段より下段に涉り、春時の花木を叢植し、又秋咲の草花、及び紅葉類を夥多植込み、其間に、百間の大馬埒を展開して、以て自然春園

と秋園との経界とせしなり、○果園は、中段地の北半に在りて一郭を成し、一名百菓園とも云ふ、種々様々の成り菓物を列栽したる(前)中に、年古りて大なる郁子有り、皇国にて郁子進獻の古実あれば、青き髭籠に入れて、大樹家へ獻ぜられたり、○竹園は、上段、中段の南半に在りて、各種の竹筠を栽培し、蝦夷地方の笹類はいふ迄も無く、支那産の奇品類をも、培養せられし事は、桂園竹譜に記載せしを以て、証左とするに足れり、曰く、玳瑁竹は、漢名を紫籜竹と云ふ、高さ二尺許、葉は箬に似て、細小、云々、此竹、今白河侯大塚の下邸に在り、又曰く、簕竹は、一名洪竹、高五六尺、枝幹共に箭竹の如く、每葉白色の間道在り、往時清人の携来りし者なる可し、今白河侯大塚の下邸に在り、云云、蓋し此兩種奇竹は、文化文政頃に、唯此六園内の竹園に於て、実物を看得せし者なり、樂翁公の雅尚に非ざるよりは、争でか斯かる珍種までも、蒐集蒔種する事を得べけんや、知らず大正昭代の今日、海外交通の便利も自在なるに、是等竹種を、清国地方より移植培養する人、有りや、無しや、此山莊は、抱屋敷の故を以て、維新の際に、桑名藩は、朝敵たりとて、一旦改易となり、二年己巳に至りて、新に六万石を賜はり、小藩の列に加へられたる次第なりしも、茲処を上地せずして、今尚松平子爵の所有に属せり、然れども、園池景象は、悉皆破壊して、復た昔日の面影を、瞥見する事能はざるに至りけり、公は猶又此山莊の外に、深川洲崎に於て、海莊を設置せられたり、侍臣岡本茲契の記に、深川入船町海岸の御邸は、上総五井侯の抱地、並に麾下の士、三宅某の第地を購入して御隠棲の游予に充てられたり、纔に一千余坪の地なれど、海を以て園池とし、旧池を浚ひ、其土もて小丘を兩

所に築成し、亭榭を經營して、松月齋と命名し、軒端に松を植並べ亭前の山は、白花琉球躑躅を満栽す、又東南隅に、望岳台を設けて、御腰掛を置く、茲に登れば、西は永代橋より、築地、品川、南に羽田まで見ゆ、西南連山の上に、富岳突出して、間近く見へ、東顧すれば、房嶺斜めに聯りて、其下に、真帆片帆の出船入船、遠く近く接続せり、又御座の南面池岸に、石造の紅毛日時計を据ゑ置かれ、海岸山上に、圭の形したる小閣を建て、青圭閣といふ、更に海面へ六十間四方築立を命じて、東南の高波襲来防禦す、茲に石製小祠を立て、式内島穴神社を勧請せらる、築立の中央、自ら池となり、鳧雁なむどの遊び所となれり、是に於て、行徳より塩汲て世渡るあまを招呼れ、塩畑を造りて、塩煮させ給ひたり、又松月齋御手水前の柱に、爐篋の古材もて、掛版を造り、版面に親書を刻す、其御文左の如し、

よし月を待つとても、戌の時過ぎなば、帰る可し、世すて人なりとも、一宿をゆるさず、

郢曲、音楽、謡曲は、心にまかすべし、三筋の緒の調べはさなり、みだりなる事なすおのこは、いるゝことをゆるさず、

此園に遊ぶ者は、から、大和の言の葉はさらなり、ばせをの垂くむものなりとも、必ずひとことの露は、のこしたまふべし、みやびの道に、へだてなければ、たかきひきゝのことわりに、言葉を費すべからず、

此御園の桜樹は、普賢象など云へる、殊に遅ざくらを選び植させて、年々浴恩園の花を見始め給ひ、六園館の御観花もすみて、世の中、落花に至る頃、此処の花盛なるを、来賞せさせ給ふに、築地御

住居より、船便もていつも入らせらる、よて御船艤の略をも、記置きぬ、

今の世に、諸侯隱棲の方々、舟遊とあれば、町舟にて忍びにて出てらる習ひ也、然るを我老公は、公儀の御許を取らせ給ひて、御船二艘を新造し、一を探香丸と銘し、一を問影丸と銘せられたり、探香丸は御召船にて、親書の額を掲げ、川船役所の極印を受け、昼夜の御船印雛形を官へ出しおかれ、昼は、麻布四半、花田色、輪貫白染出しの御旗、夜は、朱色御紋を白く描きたる高張灯<sup>提</sup>灯を押立、屋形の周囲は、丸提灯御紋黒く、腰輪違をひしと画きたるを、前後左右に照し、いづ地より見ても、公の御船とわかるやうに、公然たる御船行は、世に類無き事にて、たふとき御見識なり、幕は花田色、御紋を白く染出せし縮緬にて、四方へ引廻し絞り上げ、屋根軒口へ、御持鎗を掛られたり、探香丸は屋形内四畳敷、四挺立、問影丸は屋形内三畳敷、三挺立、云々、維新の際、船、園、共に廃す、

楽翁公は、右記載の如く、江戸の三邸に、林泉を設置せられし外に、其封邑なる奥州白河の、小峰城内の三の丸に於て、東園、西園、南園、北園、の四園を造成し、更に其城南一里余の処に、大沼といふ沮洳の地有りしを開拓して、四季の花木を栽培し、城下士民の共游場を設け、和名を関のみづうみと命し、漢名を南湖と称して、十六勝の名所を選定せられ、其一勝毎に、和歌と詩を募りて、碑に刻し之を湖畔に建て、後昆に貽伝せられたり、此南湖十六勝は、今猶荒れながらも、現存するを得たり、然れども本編に不用なるを以て、之を省略するなり、我嘗て公が各処造園の断案論文を作りたれ

ども、長篇なれば、茲に掲示せず、但浴恩園と六園館との、焼亡事項の概要を略述して、此篇を完結すべし、文政十二年は、公七十二歳にて、二月より病臥せられけるが、三月中旬、音羽青柳町より失火して、直に大塚六園館に飛火し、園中亭榭、悉く烏有に帰したり、又数日の後、神田佐久間町より失火して、烈風狂焰、四方に延焼し、先づ八町堀の上第、蛸殻町の中邸を焼尽して、終に築地本願寺を焼き、其余焰忽に浴恩園に波及せり、公即ち老病を以て乗輿し、火を避けて、宗家伊予松山藩侯の芝三田の下邸に赴き、療養ありしが、五月十三日、其邸に於て、卒去せられたり、浴恩、六園の両大苑一時に焼亡したれども、殿館亭榭は、其後再造有りて、林泉も亦皆重修を加へられしかば、数年後には、山水風色、依然として旧觀の美を露呈するに至りし事は、天保七年、加藤雀菴隨筆、さひづり草二百余巻の内なる、あまり草と題せし、浴恩園遊記の文中に記載したる光景を一読して、以て之を徴するに足れりとす、(後略)

## 219 旗本屋敷の荒廢

「明治庭園記」  
小澤圭次郎 著  
大正四年(一九一五)

江戸旗本屋敷上地に付て、庭園破壊し、桑茶植附の事、

幕府の旗下は、古来八万騎と称せしが、其実数は固より之を確知し難し、而て其家禄は、百俵内外の蔵前取より、八九千石の地行取に至るまで、各其分限に應じて、大中小の第地を賜はり、其中には、

家格に准して、居第以外に、中屋敷と下屋敷を賜給せられしが、其下屋敷に至りては、二箇処、或は三箇所を占領する者ありとす、故に旗下屋敷の員数は、十万箇処にも及ぶべし、猶又旗下より下級なる、微禄小身の御家人と唱へられたる儕輩に至りては、大抵組屋敷と称して、数十家団結を成したる、一郭内に列居せり、是等小吏の最多数を包擁せし街坊をば、百人町と称せしなり、青山、大久保、新宿、等孰れも百人町有りしが、著名の俚謡、鈴木主水の故を以て、青山百人町の名は、都鄙の人口に膾炙せり、旗下屋敷の淵藪とも称す可き場所は、番町、駿河台、小川町、駒込、小石川、小日向、市谷、牛込、四谷、赤坂、青山、大久保、下谷、本所、等にして、一二百坪の小第より、数千坪の大第に及ぶまで、鱗次櫛比して、外望の斉整を為すと俱に、内部に於て、多少庭園の設置なき者は之有らざりしなり、其煙霞鋼疾、泉石膏盲の家主に至りては、山を築き池を穿ち、奇石珍木、名花異卉を羅致して、以て怡目娛心の資に供せられし者も尠からずとす、蓋し封建時代の制度に於て、一旦下賜の屋敷は、子々孫々之を伝領し容易に移動転換の虞無きを以て、一度新脩したる庭園は、其子孫の世に及びて、古色蒼然たる光景を露呈すべきは、言ふまでも無き事なり、之を明治時代の新脩庭園が、僅に第一期、或は第二期経過の間に於て、忽然園主の変更を看る者に比すれば、則ち其花木竹石の幸、不幸は、甞に雲泥の差あるのみならず、人間生命に、敢て今昔の異同無きも、庭園天数は、自ら前後の脩短を存する事を、覚知するに足る可きなり、さて旗下諸氏中にて、千石以上地行取の人々が、幕府廃絶、王政復古の際に方りて、新に朝臣に列せられ、其所領の高下に從て、上

大夫。中大夫。下大夫の称号を賜りし者も多からずとせず、万石未満、百二十一藩あり、後に出す、前記第二章、浜苑の末項、浜殿大手御門取締の照会書翰に、御曲輪、御門々々の振合を以て、中、下、大夫の内にて、相勤、云云、とある者、即此中大夫、下大夫の事なり、上、中、下、三大夫以外の旗下諸氏は、江戸開城前後に、皆其屋敷地を奉還するに至れり、是等の奉還邸は、大抵其家屋を取払ひ、其庭園を破壊し去て、土地を開墾し、桑樹と茶樹とを培養せられけるが、之を東京の桑茶植附と称して、其評判は、一時嘖然として、都鄙に喧伝したり、予は明治三年庚午の春正月、北勢より再び首丘なる東京に來りしが、遷都の後、日尚浅きを以て、旧邸の廃址は、茫々相接し、新圃の桑茶は、簇々相連る、戸口大に減少して、市井亦自ら閑寂を極め、光景荒涼として、人煙蕭索たりければ、即ち所見を詠して、七絶一首を得たり、左に録して、以て証と為す、

旧士飄零去旧棲、新都綿邈起新畦、驢虞夢斷春風冷、到处桑茶路欲迷、

旗下の勤役は、種々様々の差別あれ共、最大潜勢力を具有したる者は、小禄にて奥御右筆組頭を最とし、大禄に於て御側衆を最とす、此御側衆の中にて、御用御取次を以て、威權薫灼の極盛者とす、故に此勤役中に在りて、別墅を構へ、美麗莊嚴を穹極したる、林泉を経営せし人、少からずして、其林泉、幸に破壊の厄を免れて、今時に残存する処を、二つ三つ、左に録出す、

○本郷丹後守別業、駒込上富士前町に在り、現今は、木戸侯爵の所有なり、第二編に、之を詳説すべし、

○土岐美濃守別業、本所太平町に在り、津輕伯爵の所有に歸して、

一時は其盛を究めたれ共、近年大に荒蕪に傾きたり、第四期の部に詳説すべし、

○白須甲斐守別業、本所三ツ目に在り、維新前に、出羽莊内藩主酒井左衛門尉侯に歸し、第三期間に、北白川宮御別荘となる、第三期の部に記す、

○平岡丹波守別業、小石川丸山町に在り、維新の際、大に荒蕪し、後、加納某の別墅に歸せり、第二編に之を詳説すべし、

○さて奥御右筆組頭勤役中に、経営せし別荘にて、幸に記文在りて、其勝概を想像すべき者を、左に節録す、鈴木白藤著、夢蕉、書名なり改七年五月の条下に、曰く、廿六日、鈴幽谷、東道主人として、秋山内記番場の別荘に至る、園の広は、漸千畝に過ぎずして、人工を費す事、殆ど三千金に非ざれば不可成と、諸子評せり、家甚広からずして、曲折委屈、数千席の家に入るが如し、手を尽して造成し、入て迷かと疑はる、或云、此家本邸、祝融の時、主人爰に来て、事を弁じ、官事を治むと、故に少しく心を用ひて修管せしと、先主人の人に語りし由なり、実に今居住の浜町の家は、少も不用工、尋常家屋にして、儉素を人に示す、亦術者の用心なり、此所は幽僻にして、人來も稀なるに、斯く経営せり、一柱一梁、皆凡庸の物に非ず、頗巧を極めて造作す、且珍奇の物は、多く隠所に在て、人目に触れざるを要とす、而て心を用ひて見る時は、皆尋常ならず、量るに四五万戸侯の富に非ざれば、不能成、中書組頭の富、推て可<sub>レ</sub>知也、楼は二間、紫薇楼扁額、魚澄老人敬義書于董堂、椽三尺幅、欄干、屋根裏、杉丸太、松皮附、杉皮むき、紫竹交り、天井縁、梅<sub>ツガ</sub>柱目、上の間十畳、床違棚、次の間、九尺に三間半、上り口二ツ、

柱皆梅、下座敷、上の間、天井黒べ杉、縁梅、椽類楼と同じ、次の間、茶室あり、戸棚文晁画、炉あり、又戸棚、旧青金張付、壁砂子、金屏風あり、其次の表座敷十畳余、入頼附、戸棚伊川院画、柳燕なり、花瓶唐物磁器、長一尺余染付至て好し、蝙蝠、白地紺焼、可<sub>レ</sub>見、此余小室二所あり、踏段石、鞍馬見かげ、沓間半許、黄斑入青石二枚、池の淵に在り、又橋石四枚を架す、池端三所あり、弁天社と稻荷社あり、臨池亭四畳半、屋根茅葺、四角石井筒、額は養拙園とあり、石灯籠四ツ、山後に二ツ、池中三ツ、合九ツ、五重塔二基、藤架あり、庭中一座の円石、薄紅と青色と交りて、大きき五六尺、石面滑沢にして、恰も彫琢を加へし如し、不知<sub>レ</sub>何名、其余、園石尚多し、是所見の大概を記するのみなり、以下、我顧ふに、此秋山内記が、本所番場に経営せし別荘養拙園は、広袤漸く千畝に過ぎず、其木石皆不貲の品類を蒐集して、工費の景況、当時にて殆ど三千金を消磨するに非ざれば、之を成就す可らずと、座客諸子の評を記載せり、試に文政時代の三千金を、明治四十年後の貨幣に比較するときは、果して幾倍の金位に相当す可きや、詳知し難しと雖も、酔園子の青年時代、安政頃の錢価を以てすれば、其一文錢が、維新後には十文錢に通用せり、然れば、三千金は即ち三万金に齊しとす、況や安政より四十年前の文政の初頃、物価低廉の時に於て、三千金を費して、一千畝許の丘園を賣りしは、寔に驕奢の至りにて、目今五六万金を以て、一千坪の園地を修治するに匹敵す可し、其善を尽し美を竭せし状況を察するに足れり、且其家屋は、曲折委屈して、数千席の家に入が如く造成し、一柱一梁、皆凡庸の木材に非らず、工巧を究極して、之を潤飾し、四五万石の大名の富ならでは、之を

締構する能はざる可し、と記したり、是に由て之を觀れば、幕府時代に、奥御右筆組頭の要職に居る者は、鉅万の収金を掌握せし事を想像すべきなり、知らず今人此記文を見て、果して何如なる感懷を興起するや、否や、

○天保時代に、此要職を勤められたる大澤彌三郎の屋敷は、本所藤代町にて、百本杭の側に在り、此屋敷も維新の際に、上地と成しが、四年辛未の春、箕作中博士大学南校教授麟祥君也、今の学位博士称号とは、別にて、官職の名也、が、其邸地を払下げの時に、旧邸の庭石、庭木戸、等孰れも絶品のみなりし事を、我は第二期の初に於て承知したり、其詳細なる事實は、第三編に、之を解説す可し、抑も大身頭官たる御側衆や、小祿要識（愚）の奥御右筆組頭の外の大小旗下に在りて、其屋敷中に、設置の林泉が幕府の滅亡と共に、破壊に帰し、或は荒蕪残存せし者、凡そ幾万箇処ありしや、固より之を知る能はざれども、茲に我が親しく聞見に及びたる者、二三箇処を挙げて、之を略説し、当時の事態如何を、察知するの資と為す、

○幕府の儒役、林大学頭の屋敷は、内郭八代洲河岸に在りて、西面斜に馬場先見附に対す、此に山水造の名園ありて、巽園と称されたり、西邸、東岡、涼柵、憩樹、草橋、南塙、水亭、花逕、菜圃、月楼、聴雨移、陶写軒、豁所、等の諸勝を具へて、其山を默山と云ひ、其池を磨湖と云ふ、此林泉は、文化年間の興造にして、上地の時の大学頭林昇の祖父、述齋先生の心匠に成る者なり、先生は、濃州岩村藩主、松平能登守乗蘊侯の庶子にて、熊藏と称し、文学を好みて、在野の学者と交遊し、世に蕉隱公子と称せられて、賢名朝野に伝播せり、寛政革新の際に、白川源侯樂翁公の推薦により、特命を以て、

林氏を嗣ぎ、大学頭となりて、彼の著名なる寛政三博士柴野栗山、尾藤二洲、古賀、を総攬して、大に学政を振起し、林家中興の大儒なり、故に其風流雅尚も、亦一世に傑出し、襟懷を風月に寄せ、興趣を林泉に寓し、晨夕嘯傲して、一園の榮悴を感観し、四序の代謝を賦詠したる巽園詩篇は五七言一百六十有余首あり、又此巽園の外に、浅草今戸に水館を構へて、鷗窠と命し、谷中村に村莊を設けて、六間堂を作り、其園名を賜春と題し、小石川に別墅を置て、錫秋園と号せり、又更に代代木村に、支族某氏の別莊有しが、先生一日遊覽して、其地形を賞し、自ら修治を加へて、攬岳亭、延緑混碧舎、揖岳台、等の諸勝を設置し、莊名をば聽松居と称せられたり、蓋し其莊内、最松樹に富みたるを以てなり、凡て是等諸庭園は、維新に際して、皆破壊に属せしが、独り巽園の真景を描ぎたる紙本横幅のみ、一旦散佚して、又林家に再帰を得たり、第三期の初に、我其真景横幅を臨摹せしめて、題詞を作りたり、左に之を抄出して、其顛末を表示すべし、

#### 臨模巽園全図の記

生者必滅、会者常離とは、仏典の警語なるが、我は離者常会とは行かずとも、離者が偶然の会合あるを知る、此林家巽園全景図こそ、離者偶会なりけれ、抑も慶応の末年に方りて、幕府の土崩瓦解するをりから、巽園独り瓦全を得らるべきや、林家居邸も、かたの如く上地となりて、默山崩潰し、磨湖埋湮して、彼の名所旧蹟の種類を撰集せし樹木なり、草花なり、皆拔捨て、其跡は、一時茫々たる野原とぞなりにける、此時にあたりて、巽園の昔の面影をしのぶたよりとも成可き者は、唯此全景図のみなり、然るに桑滄変遷の際なれ

ば、一幅の全図も、亦遂に散佚したりける、廿歳余を経て後に、某人不図此幅を得たりしが、昔時林門の昌盛を極めたりし事どもを、しのぶ余りに、之をば旧園主のもとに、返壁すべく思立ちしに、其頃、旧祭酒家学斎先生林昇君は、下野国日光山、東照宮の祠官となりて、日光の町に住居せられたり、某わざ／＼此幅を携へて、林子をたづねて、其志を告げたるに、林子大に喜びて、某の篤志を愛て、其しろを与へて、之を買収せられけりとぞ、其後、我友如電大槻子、ある用を帯びて、日光に行きける折に、林子を訪ひ、四方山の物語せし時、林子此画幅を出して示され、其席にて之を一覽せしかば、直に我が園癖の顛末を告げ、此巽園詩文は、既に其編輯する所の園林叢書の中に臚載せり、然れども、此画幅の摹本は、未だ蔵弃せざるべければ、暫時之を恩借せんとして、東京に携帰りて我に送致す、我は驚喜の余に、画学生磐瀬玉岑をして之を臨摹せしめしが、原幅は前述の次第にて、之を納る箱も無し、故に如電と相謀りて、桐篋を新製し、これにをさめて、日光なる林先生の許に送還せり、嗟吁人や物や、離合無常にして、聚散有数なるは、素より之を前知すべからずと雖も、往昔かの珠は、孟嘗の行化を以て、合浦に復還し、現今この幅は、先生の德行によりて、林家に再帰したるぞめでたけれ、是我が離者偶会と、返語する所以なり、明らけくをさまる御代の、三十とせ余り、二つの年、衣更ぎの十日の夜、月の都の西ならで、鳥が啼くあづまの京の小石川なる丸山町、古味堂の燈火のもとにて、ゑひぞの主人、源の多可良（圭）しるす、

○成島大隅守の屋敷は、下谷徒士町、和泉橋通に在り、文久の初に、家屋を改築して、新楼を起し、之を春声楼と称す、後園に池有り、

邱有り、邱上青松有り、池中白蓮有り、蓮花は馥郁たる清香を吹き、夏暑を消するに宜しく、老松は蒼蒼たる景色を呈して、歳寒に傲るに足れり、其他の花竹、秀而不野の景勝を具へしが、上地後に至りて、破壊に帰したり、隅州は、初に甲子太郎と称して、奥儒者役なりしが、維新の際、帰商して、遂に洋行し、帰朝後は、健筆を揮て、能く諷刺を滑稽に寓し、感慨を詩賦に寄せて、江湖の間に、才名を流伝したる、朝野新聞主筆、柳北先生即是なり、元文年間、八代將軍有徳公の台命を奉して、王子権現祠の碑を、飛鳥山に樹立せし、東部図書府主事鳴鳳卿は、先生の祖先にして、爾来五世、皆奥儒者にて、兼て和学に通曉せざるは無し、是を成島家の特色とす、而て今や、其嗣の所在を、知る可らざるに至れり、

○家禄六千石の大旗下、阿部健次郎の居邸は、麴町七丁目南側に在り、茲に澹園と称したる林泉有りけり、昔時安永の頃の園主は、大文学と云ひて、文人学者と交遊せられて、耽学好古の士也けり、讃州高松藩の碩儒、芝山後藤世鈞をして、其澹園の記を作らしめけるが、其文章は、芝山文集中に存するを以て、其要領を節録す、（後掲圖參照）「入園之處、折竹為門、甚窄小、僂僂妨冠幘、右有閣枕池、括一園之勝者、曰澁華、池曰濯月、修三十弓、広居三之二、園外不見水之所、由蓋為暗竇、引水入園、閣前有石、平如席、大可容数人坐、為忘魚磯、池之良隅、有井在池中、不与池水相属者、曰湧玉泉、稍南得原、曰合歡、因所植、得名、是為園之東、至原尽处、桂樹為林、穿林跨澗、為橋、橋以桂為氏、澗名噴雪、即池水之所泄也、橋南之岡、青松冠列者、曰冠松、眺赤坂、麻谷、銀台、等者、曰閱勝台、足無余地、目有余觀、台後皆脩竹、秀

葉萋々、翠筠浮々、園南至此而極、曰篩月、篁下取纖徑、循池通歩、水之曲处、多蓮藕、各景灑灣、岸之列楓樹、曰楓岸、洲之時見時隱、曰鷺洲、楓岸之後、漸上者為椿丘、亦因植得名、園西南隅、花卉之品若干、雜草之品若干、朝而灌、夕而鋤、名曰四時之畦、無所不有、園之西尽於此、左則至池之北岸、雜木鬱列為林、而辛夷独擅美、林窮得柴関、開関而入、有圖書之庫、曰白台、有斎、扁曰尚白、明窓淨几、宜読宜飲、宜琴宜碁宜談、寔居澁華之後而差西、閣与斎皆南向、薰風消暑、午月媚夜、一園之規、大略如此、而總名之、曰澹園、云、夫之治也、不可遽者有三、木不可遽喬、石不可遽苔、衆卉雜草、不可遽行列、而此園創于前志州君、潤色於後志州君、於今三世、喬木森聳、石老苔古、衆卉芬郁、雜草蔓滋、殆百年之積也、是数者皆具、而主不配園、則園實為冤焉、今君為之主、而園之主主相得而不相辱、君、忍侯之別族、禄非不優、官亦不為賤、所置者山水之遊耳、故園以代遊屢、以下斯文末に、君は忍侯の別族とあるは、寛永十六年、阿部豊後守忠秋侯、武州忍城拝領以來、文政六年に至るまで、九代百八十余年間、忍藩主なれば、園主大学祖先が、此忍侯より分家したる次第なり、蓋し後藤芝山が、澹園記を作りし時に、園の創製以來、既に三世に及び、百年を経て、喬木森然として聳立し、石老ひて苔も亦古びたりと書きしが、爾後更に八十余歳を閱して、維新の際に至り、屋敷は上地となりて、古色蒼然たる園池、忽破壊に帰したり、若しも当年大学君の文学無かりせば、芝山も園記を作る可き期会有らざりしならん、苟も園記無ければ、則ち廢園後四十余年を過ぎたる今日に於て、いかでか能く澹園一百二十歳前の光景を、追

想する事を得べけんや、吁嗟、文章の世上に功績あるや、偉大なるかな、

○鷹匠頭内山七兵衛の屋敷は、今川小路に在りて、茲に山水造の古園有り、（目下九段行電車通路北側に御岳教の神祠あり、其背後に縦の太木が見ゆる所是也）数代前の主人七兵衛、性林泉を嗜みて、之を興造せし由なるが、爾来百十数歳の星霜を経歴して、樹は悉く古色を帯び、石は総て蒼苔を粧ひたり、錦鱗池中に潜躍して、毎に芳餌に飽き、文禽林間に去来して、時に好音を伝へけるとぞ、此園池は、幸に上地の後も、破壊の厄を免れて、聖代に残存するを得たれば、第二期の間に、社寺局長桜井某の所有に歸したり、抑々内山氏は、持高僅に二百石の小旗下なれども、鷹匠頭は、布衣千石高、役料二十人扶持を給与せられて、子孫世襲の官職とす、大大名が参勤交代して、各自の封邑に赴く時は、將軍家より、飼養の御鷹一二羽を下賜せらるゝ恒例なれば、鷹匠頭は、各大藩主より、歳時莫大の音信贈物を受領する為めに、其富は、数千石取の大旗下を圧倒するに足れりとぞ。斯く勢力ある官職ゆゑに、苟も園池新脩の挙を聞くする時は、御鷹拝領の資格を保有する所の大名より、或は樹木類、或は岩石等、或は石灯籠、五層石塔の属を、需用に任せて、贈貽せらるゝを以て、容易に絶好林泉を造成する事を得たる者なりと云へり、但し幕府の鷹飼屋敷は、駒込千駄木と、雑司ヶ谷の二箇処に區別して、千駄木の方は、戸田五介の支配とし、雑司ヶ谷の方は、内山七兵衛の支配なり、我は十二年の春、第三次続統として、山高サンドメノゴザイ紫山名は信離大藏省書記官、兼帝国博物館理事なりの義妹、鏡子を娶りけるが、其生母は、文化、文政の太平極盛時代の鷹匠頭、内山七兵衛の長女にて、山高某

に嫁せし人なり、是を以て、其処女の際に、生家内山氏が、栄華を窮めし事歴を、屢次絮説せられしが、其中の園遊一節を略述せんに、每春苑内の百花満開、春禽好轉の時に及べば、具慶の身にて、兄弟姉妹と相俱に、池頭離館に於て、観花宴を設け、林間歇店に在て、田楽豆腐を焼かせなどして、最初は、各自和歌当座題を詠出し、後には、藏金鶏カクレンボ、盲公促唾佬メカクシアソビ、等を行ひ、或は短舸を泛べて、魚を柳陰に釣り、或は草履を脱して、狎を芝原に逐ひ、倦来れば、則ち池館に憩ひて、脚を休め茶菓を喫し、飫去れば、則ち山亭に登りて、眸を定め城市を望む、遅々たる春日、虞淵に逼れば、煌々たる球灯、花間に連なる、互に乗興の樂有りて、共に促帰の虞無しとす、是に於てか、飲且食兮、歌而舞ひたる游況は、老後の今も、猶その昔をしのぶにあまりありとて、三十一字の国詩数首を示されけるも、我は敷島の道にいと疎ウトければ、皆之を忘れたり、蓋し良辰美景に逢ひて、家園の内に団欒し、賞心樂事を叙せしは、彼の李青蓮をして独り其天倫の樂事を擅にせざらしめたり、洵に園遊の上乗にして、近時世間に流行する所の没風趣極りたる、園遊会などは、日を同くして語る可らざるなり、

○大祿の旗下の中にて、交代寄合表御礼衆と称する者二十家有りて、孰れも、門閥由緒ある家柄なれば、幕府より特別な礼遇を蒙りて、居住上屋敷の外に、中屋敷、下屋敷等を賜はりけり、大成武鑑にも、此二十家は、大名同様に記載しけるが、此内にて、山崎家、宇田源氏、本国近江、山崎主税助高五千石、在所備中川上郡成羽、江戸より百八十七里余、上、麻布一本松、大手より三十八丁と記せり、上は、上屋敷、一本松は、本村町なり、其屋敷内に、山水造の

古園有り、池は蝦蟇池と云ひて、名高きものなるが、池畔に最も聳目すべき、大木の躑躅多し、其開花に方りてや、満園の紫雲、倒に水面に映して、池中も亦満目の紫漣を漂はし、上下四辺、物として紫光を帯びざるはなく、頗る絶観なり、此園池花木も、屋敷上地の後は、大に荒蕪に帰したれども、幸に破壊せられずして、遂に前大蔵大臣子爵渡辺国武君の所有と成りたり、第三期の部分に於て、更に之を縷説すべし、

# 【漢文訓読】

園に入るの処、竹を折りて門と為す。甚だ窄小にして、僂僂冠幘を妨ぐ。右に閣有り、池を枕にす。一園の勝を括むれば、湛華と曰い、池は濯月と曰う。修さ三十弓、広さ三の二に居る。園外水の由る所を見ず。蓋し暗竇と為し水を引きて園に入るるならん。閣前石有り。平にして席の如し。大きき数人坐を容るべし。忘魚磯と為す。池の良隅に井の池中に在る有り。池水と相属せざれば、湧玉泉と曰う。稍南に原を得たり。合歓と曰う。植る所によりて名を得。これ園の東たり。原の尽きる処に至り桂樹林を為す。林を穿り澗を跨ぐに橋を為る。橋は桂を以て氏と為し、澗は噴雪と名づく。即ち池水の泄する所なり。橋南の岡は青松の冠列すれば、冠松と曰う。赤坂、麻谷、銀台等を眺むれば、閼勝台と曰う。足に余地は無けれども、目に余観有り。台後は皆脩竹にして、秀葉萋々、翠筠浮々たり。園南ここに至つて極まれり。篩月と曰い、篋下に織徑を取り、池に循い歩を通ず。水の曲がる処、蓮藕多し。景灑湾と各づく。岸の楓樹に列なれば、楓岸と曰う。洲の時に見え時に隠るれば、鷺洲と曰う。楓岸の後、漸らかに上る者は椿丘たり。また植えるものによりて名を得。園西南隅、花卉の品若干、雑草

の品若干、朝にして灌し夕にして鋤すれば、名づけて四時の畦と曰う。有らざる所無し。園の西ここに尽き、左すれば則ち池の北岸に至る。雑木鬱列して林を為す。しかして辛夷独り美を擅にす。林窮まつて柴閼を得たり。閼を開きて入れば、図書の庫有り。白台と曰う。斎有り。扁に尚白と曰う。明窓淨几、読むべし。飲むべし。琴すべし。碁すべし。談ずべし。実に湛華の後に居して西を差し、閣と斎と皆南に向き、薰風暑を消し、午月夜に媚す。一園の規、大略かくのごとし。しかして総じてこれを名づけて、澹園と曰うと云う。それこれを治するや、遽にすべからざるもの三有り。木は遽に喬くすべからず。石は遽に苔すべからず。衆卉雑草は遽に行列すべからず。しかしてこの園は前志州君に創まり、後志州君に潤色し、今に三世たり。喬木森聳、石老苔古く、衆卉芬郁、雑草蔓滋、殆と百年の積なり。これ数なるもの皆具して主は園に配せざれば、則ち園実に窳たり。今君これが主と為りて園の主と相得て相辱めず。君、忍侯の別族、祿優ならざるにあらず。官もまた賤と為さず。置しき所は山水の遊びのみ。故に園もて遊屢に代えよ。

## 220 日本第一の大林泉、戸山荘数奇の運命

「明治庭園記」  
小澤圭次郎 著  
大正四年（一九一五）

戸山荘の極盛時代は、寛政五年、大樹文恭公が始て台駕を、斯林泉に枉げて、置酒放鷹し、鎮日縦遊せられし以来、数次の臨遊ありしころを最とす、柴野栗山が寛政十二年戸山荘図巻の跋文に、今大

君一日臨賞、謂凡天下園池、当是為第二也。其富宏深邃、可下俟多言而知矣。とあるにても、其風光壯麗、景物雄偉の状況を想像すべし、是より四十余年後、天保十四年五月、十二代將軍家慶公も、亦此莊に臨駕ありしが、此時の事を記せし者なし、弘化四年五月、將軍再び台駕を枉げ給ひし時は、扈從遠江守泰從の記一篇を存せり、爾後六年、米艦浦賀に來り、露艦長崎に來て、通信交易を乞ひ、国家益多事に至り、幕府は急に砲台を品川灣に築造し、諸侯は俄に武備を講修するの時に方り、十二代將軍薨去せられ、上下騒然、人心恟々たりしかば、尾張侯も亦台池鳥獸の樂を顧慮するに遑あらず、後一歳を経て、安政二年乙卯十月、府下大地震あり、同三年八月、大風雨あり、此震災風害の爲めに、戸山莊も建物破損し、樹木傷倒せし者尠からず、同六年二月に及で、青山隱田より火を失し、狂焰烈風、遙に飛火して、戸山莊を襲ひ、御殿余慶堂、以下の建築物、多く烏有に歸して、林泉大に荒蕪に属せり、夫より七年後、幕府大政を奉還し、翌歲戊辰、朝廷新に旧將軍家徳川氏の後を立て、駿遠両国七十万石を賜ふて、大名に列せられ、駿州府中を治城として、名を静岡と改む、仍て静岡藩と称せり、而て東京府内の藩邸としては、神田小川町の旧榊原侯中屋敷を賜はりしのみにて、新大藩の多数家来を收拾し難し、是に於てか、尾張侯より此戸山莊を宗家静岡侯に呈晋せられたり、静岡藩にては、此莊に移居する所の士卒に命じて、直に土地を開墾して、大に畦圃を作らしむ、翌年諸侯の版籍奉還後に、封建を廢して郡県と為し、旧藩侯を以て、新に藩知事とせられしが、其後未だ幾ばくもあらずして、西郷隆盛が薩州兵士の大隊を引率して、之を御親兵と称し、東京に上りし後

に、此戸山全境を挙げて、以て御親兵の屯営と為したり、是に於てか、此莊の名勝は、益荒敗するに至れりと云へり、蓋し平野知雄か、戸山莊の主人変更したるを聞きて、其林泉後來の盛衰、何如を杞憂して以て、孫子の為めに、年来視聴に存せし、事實を詳述して、戸山御邸見聞記を著しけるが、其後未だ二歳に滿たずして、遂に廃苑に歸したり、往時寛文七年の創創より、是に至りて、二百零二年の星霜を経歴し、江戸第一の壮大林泉にて海内無双の絶好景物なり、と賛歎艶称せられたる戸山莊の破壊を觀るに至れり、陸軍戸山学校は、即ち此莊の旧址にして、今は豊多摩郡に属す、

## 第二節 花名所の変化と盛衰

### 221 巢鴨造菊の迎えた維新时期

『増訂 武江年表』  
斎藤月岑 他 著  
文久元年（一八六二）記事

○今年も根津千駄木藪下の辺、菊の造物多く出来て日々遊觀の人多し、巢鴨染井の造菊は、前巻にいへる如く文化九年の秋より始り、江城の尊卑日毎に群行してこれを賞しける頃、先考に誘れてこのわたり見めぐらひしも、明治戊寅の年に及てはや六十七年の昔となりぬ、夫より後も大かた年々にこれを造りて此里の名物とはなりぬ、然るに造り菊は鄙俗の物として見ざる人あれど、此時節丹楓の佳境

を繹るの外に花なき頃にして、東京の中央より道を阻る事も遠からざれば此辺に徘徊し、団子坂に名を得し河漏麴に一樽を傾け、はるかの野径を眺望し、或は此辺の拍戸に酔を催し、衆人とともに連牆の芸花園に入庭中をながめ、菊の花壇盆種の草木多かるを賞し、一日逍遙して夕照の斜なるを惜む輩も鮮からず、真にこれ仲秋の一樂事なり

## 222 維新前後の堀切の花菖蒲

『隅田川叢誌』

矢掛弓雄 編

明治二十五年（一八九二）

関連図版80

### ○堀切の花菖蒲

堀切村ハ昔より四季の草花を培養し市に鬻くを以て一村の生業となせり、殊に名高き四方堀の花菖蒲ハ、享和文化の頃、小高伊左衛門と云者、性来植物を愛し、意を菖蒲に注ぎ、始二三種を培養し、猶新種を四方に求む、其頃幕府の旗下本所北割下水に万年某氏花菖蒲を愛し、奇花数種あり、其内十二ト重を乞受、又麻布龍土に松平左金吾氏花菖蒲を以て名あり、乞て宇宙霓裳羽衣等を得たり、其後富士登山の帰途相州より一種の花菖蒲を得て持帰る、是を七福神と称す、此花数年を経て変化せしを醉美人と名つく、是も又追次奇花を産す、世に牡丹咲、或ハ狂ひ物と云ハ、多く是より変生せしもの也、又土州より十三種を得たり、其内麒麟閣泉川の二種ハ、其頃の

名花なりき、然して漸く一の花菖蒲園となれり、文政の頃ハ、其子伊左衛門父の意を繼て益蕃殖を謀り、天保の末に至りてハ、多種の名花園内に充満せり、安政三年の向嶋絵図にも堀切村伊左衛門の花菖蒲とあり、其後尾張大納言殿遊覧ありて、日本一菖蒲と親書を賜りたり、猶維新の際、松平家の花菖蒲を悉皆譲り受たり、園内名花の変化、実生の奇花、年々弥増蕃殖すと云、明治十年米国某の乞に依て、花菖蒲数百根を彼国へ送る、是より年々海外へ輸出す、同二十年六月十四日明宮殿下御遊覧在らせられたり、名花の盛ハ、毎年六月中旬也と云、此園を四方堀と云ハ、昔此邸地の四方に構堀有し故なりとぞ

## 223 朝顔の名所入谷でさえ西洋草花に代わり余命迫ることとなる

『東京年中行事』下の巻

若月紫蘭 著

明治四十四年（一九一〇）

関連図版72・73

### 朝顔

宵越しの金は使はねえやと誇つた江戸ッ子が、槿花一朝の夢と栄ゆる朝顔を昔からもてはやしたは誠に理りながら、江戸ッ子の値段が次第に下落して、金とさへ云へば不義も物かは賄賂も物かはと云ふもの多くなつた今となつては、朝顔の各所の廃滅に帰せんとして、有るも自然の勢で有る。

たつたまだ五六年前までは、入谷と云へば朝顔の名所として、菊

の団子坂と共に東京名所の一に数へられ、朝日が上つたあとの朝顔は趣がないとあつて、まだ日も出ぬ先から浴衣一枚で、暁の露をふんでエイヤ／＼と此処に押し寄せたもので有るが、人の世に段々と趣味と意気地と云ふものがなくなつて行くのと、素人の間に次第に朝顔が培養し始められたのと、ダリヤなんど、云ふ色んな西洋の草花が恐ろしい勢で侵入して来だしたのとで、都市の人口稠密の結末は短かい期間の朝顔位では地代も払へぬこととなり、従つて地主も植木屋に地所を貸して地代を引上げるよりは、借家を建て、家賃を取つた方がと考へ出した果は、一昨年来多くは畑を潰して貸家を作る一方に、植惣、開花園を始めとして、丸新、入重、植松、入長、入久、入又、新亀、松本など云ふ朝顔の植木屋十軒のうち、新亀、松本、丸新など云ふ大店等が、日暮里池の端などへ引移りを始め、これではならぬと団子坂式に朝顔で人形を作つて挽回策を講じても見だが、傾きかけた家は仕方のないもの、一向に何の反響もないので、何れも大恐慌を来して頭痛鉢巻、とてもこれでは現状維持も六ヶ敷とあつて、これまで例年千株以上も作つたものが、今年にはほんの申訳に百株位しかは作らず、従つて入谷の朝顔の元祖としてまで知られた入谷二十七番地の鈴木豊吉なんど云ふ人杯は、五十年來此業に従ひつゝ有つたに係らず、今年からは断然朝顔を抛つて、西洋草花の珍種五百余种許りを培養して之に代ふることゝしたので、さしにも名高かつた入谷の朝顔の余命も此一両年に迫れることゝなつて了つた。

けれどもこれまで朝顔を培養して楽しむ目的としつゝも、絶えず其間に暗闘を打つゞけつゝあつた穠久、一六、奇葬、研究の四会も、

今年からは大合同をすることゝなり、菊の名所の団子坂に於ても不景気挽回の一策として、今年から此地に朝顔の土花を作り、七月九日頃から陳列を始め、一般の観客を呼ぶことゝなつたのを見ると、朝顔の流行と云ふことが全然止んだものと見ることは出来ぬやうで有る。入谷が亡びて却つて他の方面に繁栄が現はれることゝなるかも知れぬ。けれども恐らくはそれが空頼で有らう。或は朝顔の時代は最う過去に属して了つたのではなからうか。

それは兎に角に団子坂の種半にては、今年から朝顔の珍種数千株の陳列の外に、朝顔日記、妹背山、大間記十段目、勸進帳などの朝顔人形を飾り付け、薫風園にても朝顔陳列の外に、珍奇な盆栽や高山植物などを備へて盛んに客を呼び、其他の各園にても朝顔の陳列をやつた外に、旧植梅の菊そば園内には、三本の男女滝を設けて夏秋の草花を植込んで、七月九日から開園を行つたので有つた。

その他入谷を引上げた丸新の百草園は、上野不忍池畔の北方なる東京勸業協会背後の百草園に合併し、更に同会のある不忍池に面した広場を帝室博物館から借受け、不忍池の蓮の見頃なる七月中旬から数十株の朝顔を陳列し、之に七草の鉢植、西洋草花をも加へて、無料の観覧を許して之が販売を急いだので有つた。

入谷の朝顔が斯うして漸く衰へ行くにつれて、まだ朝顔の命がさう消えるものかとあつてか、都て其虚に乗じて名物を乗り取らうとの企みあつてか、向島にても今年より数多の植木屋が聯合にて、百花園横町数丁の間に朝顔を陳列し、田圃には富士鶴亀などの造り物を飾つて客を引き、亀戸の錦花園、敏樹園、成趣園、寿松園、柳樹園、植定等にも頗る沢山の朝顔を培養し、非常な勢を以て亡

びんとする入谷に喰つてかゝつたので有つた。

けれども入谷でも入重入又、植惣植松などは、今年も七月十五日から花々して朝顔の開園を行つたには行つたのである。試みに今年も開園した入谷の朝顔園の飾付けと云ふのを調べて見ると、何処の園も俗受一方を目的にした殺風景なもので、入重の開花園はなかには「ねさんろくすあしや」中庭に箱根山麓水車の二間四方大の盆景と、朝顔人形で蘆花の『不如帰』の逗子海岸の場を造り、水道を利用してそれを運転せしむるの外に、温室内には、長さ三十六尺の東海道富士川遠望及び近江八景を設らへ、入又にては入口と場内に朝顔の大アーチと秋草の築山を設け、入長は朝顔日記、葛の葉、塩原多助、牡丹灯籠、明烏などの朝顔人形に客を呼んで居た。

## 224 浅草花やしき・団子坂の菊細工の受けた大打撃

「東京に於ける活動写真」

陸奥廣吉 著

大正八年（一九一九）

関連図版75・77

公園の見世物を叙する序に言つて置くが、明治四十二年の秋、名古屋の花屋敷の園主が多くの菊花を携へて常盤座の裏に菊世界といふを開園し、電気応用七段返しを演ずると、同じく名古屋から黄花園が両国々技館に菊を持込んで亦電気応用の大仕掛で客を呼び、大正五年秋、同館の焼失まで秋の都の一名物として鳴つた。東京の植木屋連は之に対抗すべく、浅草公園外合羽橋傍に東京菊花園を開

き、五段返し七段返しを以て、菊世界や黄花園と競争した。是等のために公園土着の花やしきハ大打撃を受くるに至り、菊人形のみでは客足を引止めることが出来ず、山雀の芸、あやつり人形を改良したり、活動写真を映して応戦に努めた。此に哀れを止めたのは江戸時代よりの名物団子坂の菊細工で、昔は唯一の菊の見世物、大仕掛の背景や廻り舞台を以て人形劇を見せ、植重・種半・植梅・植熊・薫風園等に分れて盛に客を呼んだものであるが、国技館の菊が人気を得るに及んで致命的の打撃を受け、翌年から全く影を潜むる悲運に至つた。

## 225 世界で最も素晴らしい菊花展の開催

『日本事物誌』1

バジル・ホール・チエンバレン 著

明治三十八年（一九〇五）

関連図版78・79

東京の団子坂では、毎年その季節になると、非常に面白い眺めが見られる。そこでは、菊の花があらゆる形のものに作り上げられている——人間や神々、船、橋、城等々である。一般的には、歴史的・神話的な場面が描かれている。或いは、有名な芝居の一場面である。そこでは自然のままの非常に立派な菊の花も見られる。しかし、東京の上流社会の名士たちは、毎年一回、赤坂の旧御所〔青山御所〕の美しい庭園で菊の花の拝観を許される。これはおそらく世界でもっともすばらしい菊花展であろう。種類だけでも驚くべきものが

ある。あらゆる色があるばかりでなく、あらゆる形のものがある。ものすごく大輪の花があり、その周円は、一人の人間が手を伸ばしても届かぬほどである。大きな雪玉のようながあり、花弁はすべて滑らかで、次々と上にまわって密着している。また或るものは、スコッチテリア犬の乱れ髪に似ているものもある。長い花糸をひた、でのように外に伸ばしているのもあれば、巨大な仲間の花と対照を示すかのように、花弁を萎縮させて、単にうなだれている髪のようなものもある。しかし、もつとも奇妙なものは、いろいろな色や大きさの花が五、六種類、同じ菊にいつしよに咲いていることである。これは、いわば茎一本だけ附いている花束であり、賢明な接木の結果として生れたものである。一本の菊から同じ種類の花が、一、三二〇個もできたことがあるという！ また或る場合は、これとは逆の方向ですばらしい成果をあげている。すなわち、たった一個の黄褐色で、髪を乱した怪物のような花を生み出すという計画に、全精力を集中させるときもある。このような花は、「寝坊」(どの変種にも奇妙な名がついている)、或いは「金露」とか「白龍」、「漁師の提灯」(これは濃い小豆色であった)、或いは「羽衣」(これは桃色と白色の見事な房)。もつとも美しいのは「星月夜」である。これは雷文模様の花で、白霜に蔽われたアイスランド苔に似ている。これらの成果は、何年間も労力を積み重ねて初めて得られるもので、特に花の咲く季節に先だつ七箇月間は、毎日何回となく繰り返して世話をするのである。このような世話も充分に報いられる。というのは、菊は、早霜からよく保護してやれば、数週間も続く花だからである。

以上の話の大部分は、ヨーロッパの菊作りの専門家には、きつと珍しくないものであろう。今日では、この美しい花のすばらしい変種を多く手がけることに慣れているからである。しかし、ヨーロッパにおいて、菊作りに対する刺激や、今見られる実際の変種の大部分が日本から伝えられてから、まだ五〇年を過ぎていないことを忘れてはならない。

## 226 団子坂菊人形には大久保躑躅人形比ぶべくもあらず

『東京遊行記』  
大町桂月著  
明治三十九年(一九〇六)

大久保は、躑躅にあらはる。大久保停車場へは、市内より、電車通じ、汽車通ず。停車場を出れば、中百人町也。凡そ十町の間、真直にして、両側の人家の垣根の中に、言ひあはせたやうに、桜ありて、春は、花のトンネルをつくる。亦一観也。躑躅園も、その間に散在す。近年、団子坂の菊人形の真似して、躑躅人形をつくるものあれど、団子坂には比ぶべくもあらず。躑躅とは云ふものゝ、まことの躑躅は稀にして、幾んどすべて霧島也。殷赤にして俗也。道別、湖月、和智生、野中生とつれだつて、ぶら／＼散歩し、山の手線に接せる躑躅園に入る。諸園の中にて、こゝが最もひろく、躑躅も最も多し。大半は、殷赤の霧島なるが、中に、少しは、まことの躑躅もまじる。俗とは云ふものゝ、かばかり広き園に、かばかり多くの霧島ありて、而かも枝一ぱいに花満ち、高さ一丈に余る老

木もまじれるは、亦一観たらずんばあらず。

この一園だけ見れば十分なりとて、去つて線路の彼方の孤丘に上る。形、将棋の駒の如し。躑躅園、脚下に在り。四方の眺望ひらけ、躑躅園以外は、満目すべて新緑也。外山の原ひろく、射的場の土手高く、近林は濃く、遠林は淡く、恰も峯巒のかさなりあへるが如し。かすまずば、富士も見ゆべき処也。(後略)

## 227 汽車でめぐる花名所―館林の躑躅と牛島の藤

『東京遊行記』

大町桂月 著

明治三十九年（一九〇六）

### 第三十 館林の躑躅と牛島の藤

向島の葉桜……館林の躑躅山……城沼……館林城趾……牛島の藤

大久保が主にして、その外、日比谷公園、清水谷公園、花見寺など、躑躅に名ある処なれど、東京の躑躅は、どこも下らず。関東第一の称ある館林の躑躅を見むとて、ひとり出で立ちぬ。

館林は、上州に在り。佐野よりは西南二里余、足利よりは東南三里余の処なれども、東武鉄道、両国橋より北千住、越ヶ谷、粕壁、久喜、鷺宮、加須、羽生、川俣、館林を経て、足利に通ずる筈也。今は、館林より一里半ばかり此方、利根川の手前の川俣駅まで通ず。朝、六時二十分に両国橋を発すれば、九時十五分に、川俣駅に着す。凡そ三時間也。汽車を下れば、利根川也。川幅三町にあまる。小蒸氣にのるが最も早く、普通の渡舟にのるが、次に早く、舟橋をわた

るが、最もおそし。川をわたれば、人力車あり、乗合馬車あり。躑躅園まで、凡そ二里、車をとばすれば、おそくも十時半には着すべく、帰りは、少し早く、三時半に切り上げて、川俣駅に來れば、最終の汽車が、五時五十分に発す。それに間に合はぬとすれば、佐野まで二里余、車が一時半かゝると見て、午後六時五十六分までに着し、汽車に乗りて小山へ七時四十五分に着し、のりかへて、八時十二分発の汽車にのれば、上野へ十時四十四分に着するわけにて、日がへりが出来るべし。川俣、館林間を歩いて、出来るべし。やがて、館林まで汽車が通ずれば、さうなれば、一層便利也。

例の朝寝坊して、午前十一時頃、両国橋駅にいたれば、発車は、午後一時五分にて、二時間も間あり。むなく、二時間も待たむよりはとて、両国橋より一銭蒸氣にのりて、隅田川を溯り、小松島に上陸して、葉桜の向島を散歩す。今年の春は、諸処を遊行せしが、向島の花には、辜負せり。今年のみならず、数年来らざりし間に、少年俳優中に名高かりし小伝次の碑が出来居れり。木母寺に到る。梅若の塚あるを以て有名也。寛和年間、吉田維貞の子の梅若丸、人にかどはかされて、こゝまで来りて病死せしかば、村人あはれみて、この塚を築きけると也。このあたりが、向島のさくらの尽きむとする処也。

綾瀬川をわたり、北千住に至りて、一時三十五分の汽車に乗る。一時五分に両国橋を発したるもの也。川俣に下れば、三時十分也。渡しは、小蒸氣に乗る。隅田川の一銭蒸氣の更に一層小なるもの也。燃料には、石油を用ゐる。臭氣、洩れて、嘔吐を催さむと欲す。三町ばかりの川幅なれど、斜行するを以て、十町にあまる。客は、余

一人、二銭の賃金は石油にかゝるべしなど、余計な心配して、岸につけば、どや／＼と入り来るもの、十人に余る。中に、田山花袋あり。一見、これは／＼と相驚く。一人の同伴者を、太田玉茗なりとて、紹介す。十年以前、雨江と共に、松戸に散歩しけるに、その時、玉茗は乙羽と二人にてその辺に散歩し居りて、乙羽の紹介にて、始めて相識り、四人団欒して、松戸の旗亭に飲みたることありしが、爾来一度も相逢はず、今日、十年ぶりにて、相逢ひたれど、われは、玉茗の顔を忘れたり、玉茗も、余の顔を忘れたり。玉茗と云はれて、はじめて、旧記憶を呼び起せり。花袋あらざりせば、相逢ひても、それとは知らずに過すべかりし也。今日館林の躑躅を見て、今帰る処也。羽生の建福寺に住持となり居れり。花袋も一兩日滞在の筈也。帰りは、必ず立ちよれといふ。その好意を謝して、相別れて、馬車に乗り、館林の町に着して下る。

町の中程より右折して行くこと、凡そ半里。右折して林に入る。林つくれば、沼あり。城沼といふ。沼のかなたが、即ち躑躅山也。舟にて渡る。小高き岡一面に芝生ひ、人より高き躑躅の古木、相つらなりて、そのつくる処を知らず。まことの躑躅にて、花の色は、一様に淡紅にして、花輪大也。むかし、勾当内侍、新田義貞に嫁して新田郡に來りけるが、いたく躑躅を愛し、植ゑて樂めり。寛永年間、榊原忠次、この館林の城主となるに及び、その遺愛の躑躅をこゝに移植せり。五代將軍も、もとは、この館林の城主たることありしが、更に植ゑ増したり。爾来、藩侯の遊覧場となりけるが、明治の世になりて、開いて公園となせりとは、碑にしるせる所也。

丘下、西より北へかけて、沼めぐる。可成り大なる沼也。西、沼

を隔て、古城趾に対す。霞みたれば、遠くの山は見えざりしかど、近き両毛の山々は見えたり。四望はれ／＼して、風景よく、自から心ゆく処也。余の来るや、時刻すでおそく、遊客散じつくして、余一人のみ残れり。まばゆき光を収めたる夕陽、いと大きくなりて、やがて、古城趾のあなたに沈みぬ。花もすでに盛を過ぎたり。四月の二十日前後が盛りなりとぞ。暮烟の中、盛すぎたる花に対し、水に臨みて、逝いてかへらぬ昔を思ひ、何となく古意ある城趾<sup>城之</sup>を眺め、義貞を偲び、勾当内侍を偲びて、悵然として、感に堪へず。旗亭に就いて小酌し、帰りは、そこに居合はせたる車にのりて別路を取り、花は散りはてたる桃林の中を過ぎて、館林に來れば、既に夜也。車夫の導くに任せて、一旅館に投ず。浴し、酒し、飯して、寝に就き、按摩を呼び來らしむ。もんで貰ふうちに、眠くなりぬ。賃金は、先づ与へ置きて、なほませけるが、いつしか寝入りて、いつ、按摩の去りしかを知らず。

館林の躑躅が、関東第一なりとは、誇張の言に非ず。勾当内侍の遺愛は、果して真なるか、どうだか、わからざれど、沼に臨み、城趾に対し、四方の眺望ある形勝が、既に佳也。木は、大なる古木也。花は大にして淡紅なるまことの躑躅也。大久保の霧島などは、日を同じうして語るべからず。

明くる日、帰路に就き、利根川の彼方まで人力車に由る。路にて一寸左折すれば、文福茶釜の茂林寺あれども、そんなものとはと見くびりて訪はず。石油のくさき小蒸気もいやになりて、舟橋をわたり、停車場に來れば、いま出でしばかり也。半里の路なり。待つよりは、歩くが早しと、線路をつたひて、羽生に來り、建福寺にいたれば、

主人喜ぶこと甚だし。花袋なほ在り、主人と共に喜ぶ。聞けば、花袋は、館林の産也。玉茗とは、同学の友也。玉茗は、幼にしてこの寺に入り、長じて東京に学び、中学の教員となりしことありしが、この寺をゆづりうけて、今は、僧侶の身也。独往の旅の寂しきに、図らずも、相逢ひて、余も、うれしさ禁じ難し。

主人、酒肴を饗す。主人は、多くは、飲まず。花袋、よく飲み、よく食ふ。われも、面白さの余りに、覚えず、飲み過しぬ。酒量つきて、清談未だ尽きず。花袋と共に、玉茗を擁し去つて、牛島の藤を見むとすれば、葬式を頼みに来れる者ありて、玉茗は、出づるを得ず、是非とも一夜はとまれよと勸むれども、明日は用事をひかへたる身なれば、辞して、花袋と共に羽生より汽車にのりて、粕壁に下り、人力車にのり、十四五町にして、牛島の藤にいたる。人家の庭に在り。千年以上の物と称す。幹巨大にして、二三抱もあり。その割りに、棚はひろからず。房は、幾んど隙間なく下り、淡紫の色をおびて、異香四散す。房の長さ、凡そ二尺、時なほ早し。盛りに至らば、五六尺に及ぶとぞ。藤は、こゝが関東第一なるべし。側に小池あり。家に接して、又一つ藤棚あり。これは、幹はるかに小なるが、房多く、且つ長さも、古木に劣らずとの事也。客房、到る処客満ちて、ごた／＼し居れど、この名木に対して飲まざるべからずと、漸く一室を求めて、相對して飲む、熟酔の上なれば、多くは飲めず、よい加減に切り上ぐ。酔ひし上に、また酔ひたり。二人の酔夢は、藤より人力車にうつりぬ。人力車より汽車にうつりぬ。果敢なや、終に塵の巷にうつりゆくらむ。(四月三十日、五月一日)

228

## 百年前の江戸名所図会をたどり花名所を巡る

『東京遊行記』  
大町桂月 著  
明治三十九年（一九〇六）

江戸名所図会は、百年前に書かれたる者也。その記せる所にして、今は既に無きものあり、なほ残れるものあり、図会を読んで、一々その地を歴訪するも、亦一種のなぐさみ也。

深川の小名木川に五本松あり。もと五本ありしが、今は一本のみ残りとして、そのさま、いと面白さうに画かれたり。されど、百年前に、一本しか残らぬものなれば、多分今は無かるべしと、思ひながら、新大橋を東へわたりて右折し、やがて川にそひて左折す。これ小名木川也。両国橋より、行徳、川俣、銚子などへ通ふ川蒸気、こゝを過ぐる也。やがて、一本の松あり。されど木、小也。これではあるまじとて、なほ行くに、うれしや、巨大なる松あり。幹の大きさは、二抱半、高さは、割合に低く、路の側に盤屈して、路の上を蔽ひ、川の上に及ぶ。この名木は、伐りかねけむ、鈴木セメント会社の煉瓦の塀、両方より通り来るも、この松だけはよけて、塀をひッ込ませり。されど、松一面に石灰みたやうなものがかぶりて、枝も、葉も、勢なし。半は枯れたり。全く枯れむことも遠からざるべし。惜しい哉。

少しあともどりして、北行すること凡そ十町にして、本所四の橋に達す。渡らずして左折すれば、有名なる牡丹園あり。四ツ目の牡丹とも云ひ、本所の牡丹とも云ひて、東京第一の牡丹園也。屋を設

けて、牡丹を植うること、その幾百千なるを知らず。四顧みな花、色もさまざまにして、芳芬鼻を衝く。後宮三千の佳麗を一時に見るの心地す。なほ、めぐりゆくに、池ありて、鯉およぎ、菖蒲も多く、盆栽殊に多し。手のかゝりたる園也。園内に、酒茶を売る処あり。以て憩ふべし。盛りは既に過ぎたれど、なほ未だ衰へず。盛装して、来り観る女もすくなからざるが、人間脂粉の美も、花の自然の嬌態に對して、顔色なきさま也。牡丹にふさふには、楊貴妃ならざるべからず。本所の牡丹園を見ずば牡丹を説くべからず。牡丹を見ずば、花を説くべからず。言ひふるせるがごとく、これ花の王也。

本所駅より東武線に乗る。亀井戸天神の藤も、さかりなるべし。そのさまを思ひて、

藤の花少女緋鯉に麩をなげる

鐘ヶ淵に下り、東行七八町、曳舟通りに出で、四ツ木の吉野園に入る。藤棚、人を迎ふ。見るべきは、これだけにて、菖蒲は、つぼみだに無く、牡丹が唯申訳に咲けるのみ。園のひろさ、一万坪と称す。百花園、四ツ目の牡丹園などよりは、三倍也大なれども、さばかりは風情なし。園を一周し来りて、藤棚の下の亭に小憩して去る。(後略)

## 229 浅草公園から平井聖天まで逍遙し、烟突林立の都をみる

『東京遊行記』  
大町桂月 著  
明治三十九年（一九〇六）

浅草公園は、東京の公園中、最も賑へる処也。金龍山浅草寺、その中に在り。世人、浅草観音と呼ぶ、東京の寺院中、最も参詣者の多き処にして、一昼夜間、幾んど其跡をたゞず。

日本橋より浅草橋を経る電車も、上野よりする電車も、雷門と呼ばれてとゞまる処は、浅草公園の正面の入口也。もとは、風神と雷神との像を安置せる門ありて、それを雷門と云ひしが、今、門は無くなりたれど、名称は、なほ存す。

石を敷きつめたる賽路の両側に、商店櫛比す。なかみせ仲店と称す。浅草公園の第二区也。仁王門の前の左に、伝法院あり。浅草観音の本坊也。こゝを第三区と称す。観音堂のある処は、第一区也。第四区は、その西に隣りて、林泉あり、水族館ある処也。第四区の西、池をへだて、玉乗あり、珍世界あり、パノラマ館あり、その他、種々の見世物のある所が、第六区也。

第一区、第四区の奥、花屋敷のあるあたりが、第五区。奥山とも称す。第七区は、別に馬道にはなれて民家のある処也。以上七区、九万六千坪と称すれども、公園らしくして、遊歩の余地を存するは、第一区と第四区とのみ也。(中略)

歩を転じて、第四区に入る。公園の申わけに、木立あり。瓢箪池、瓢箪に似て、手を打てば大鯉小鯉、むれ浮ぶ。水族館内を一周して

ガラス窓の中に泳げる魚のかずくを見れば、恰も海底に入りたる心地すべし。

池の西は、第六区の地。ぶか／＼どん／＼と楽隊の音する玉乗に入れば、美女数人、シャツとツボン下をつくるも、幾んど全く曲線の美をあらはして、球上に踊る。珍世界は、その名の如く、珍らしきものを集む。パノラマ館に、戦争に臨みたる心地して、去つて、雲に聳ゆる十二層の凌雲閣に入り、百美人の写真を見つゝ、最上層に上れば、脚下の人は、豆よりも小に、千里来つて寸眸に収まる。花屋敷は、盆栽だけに、その名をあらはして、役者の似顔、人を迎へ、操人形、人を笑はし、山雀の芸、人をおどろかす。大象、喇叭を吹き、狒々、女を見て狂ひ、鰐魚、眠り、猿、木を上下す。奥山閣に、蓄音機の歌を聞きて、最上層に入れば、こゝも、千里の眺望ひらけたり。花屋敷は、東京の見せ物の王也。第六区より第五区へかけては、白首観音、本所の五百羅漢よりも数多く安置せられて、世上の色餓鬼を済度し給ふなりとぞ。

関東第一の聖天を祀れりと称せらるゝ待乳山にのぼりて、隅田川を見おろし、今戸の渡をわたりて、向島に上れば、桜は、既に葉ざくらとなりたり。牛の御前の前を過ぎて、柳島の妙見堂に至る。影向松は、枯株となりて存す。その穴には、蛇すめるにや。『白蛇の出づるは柳島』とうたはれて、東京の人は、蛇をも拝する也。

川のかなたに、龍眼寺あり。石の仁王立てり。秋は、萩の花、向島の百花園と対立して、媚を都人に呈する処也。(中略)

進んで、中川に架せる平井橋をたれば、名高き平井の聖天あり。こゝな応現松は、円くひろがる。木下川薬師の富の松の、横に延び

たると、好一對の奇松也。

こゝに來りて、日暮れたり。数町にして、平井駅にいたる。亀井戸、本所を経て、両国に達すべし。高架鉄道の両方を見れば、烟突林立す。水利多ければ、製造場多く、げに、こゝは、烟突の都也。その烟突の烟、夜に入るも、なほ絶えず。下らぬ不平は、天に向つて散じ、あらむ限りの力を物につくして、人間を益す、人は、烟突に学ぶべき哉。(四月十八日)

## 230 車窓からの花見東京電車八景―赤坂見附の桜

『東京年中行事』上の巻

若月紫蘭 著

明治四十四年(一九二一)

関連図版81

### 東京電車八景

十九世紀の世はまださうでもなかつたが、二十世紀になつてこの方、世は殊の外にせち辛くなつた。一瓢を携へて梅見にゆくなど云ふことは、中学生の作文にも見られなくなつた。箒を引いて堀切の菖蒲を賞するなど云ふことは大抵の人には殆んど昔の夢となつて了つた。これは必ずしも「古い」と云ふ為ではない。

此風流に一日半日を費やし得る様な人は、極めて有福な、極めて少数の人に限らるゝことゝなつて、大方の人は晨に電車に乗つて飛出し、夕べに疲れた体を再び電車に載せて帰ると云ふ風で有るからで有る。実に朝の五時から夜は十二時一時頃まで、東京の市中に

電車の音の絶え間はない。チャン／＼と云ふ運転台の警鐘の音をきゝ、ゴー／＼と云ふ電車の走る響を耳にすることに、自分は軒下の大根のやうに車掌台に生り下つた人のあはれな姿を憶ひ出す。けれど電車と云ふ文明の利器は、斯な風のあはれな人の子に取つては、せめても半時間の慰藉で有る、一時間の快樂で有る。思ひ掛けない夕立の際の電車の込み合ふことよ。待ちに待ちあぐんで漸くに一席を贏ち得たる時の老婆の歎息の大ききさよ。

此慰藉と此快樂の中に在つて、吾等市民が折々に接して『あゝ』と呼び『奇麗だな！』と叫ぶ所の自然の光景は何麼なもので有らう。自分が時折之に接して、沈みたる頭を挙げ、悶えたる胸を慰め得たるものが八つ有る。自分は之を今東京電車八景と名づけた。苦しい生活の為に追はれて、半日の閑暇も得ることの出来ない人に取つては、電車八景は用達し序の慰藉で有る。此点から云ふと電車八景は二十世紀八景とも文明八景とも見られやう。

## (一) 赤坂見附の桜

三宅坂の勾配を上り切つて了ふと、眼前十歩に見下ろす花の隧道！数十の老桜は路の左右から差し延べた腕と腕とを繋ぎ合つて、香り芳ばしく立迷ふ紫の靄の中から、まだ色褪せも敢へぬ無限の花片を惜気もなくバラ／＼と投げ下ろす。落つるを後れた花片のヒラリ／＼と電車の窓にさ迷ひ込んで、落つるともなく更に一たび室内に舞うて、やがてヒラ／＼と翻つて美人ならぬ車掌の墓口の中に隠れゆくも風情なりや。更に仰げば一つ木通りの花のトンネルが有り、右手には時期少しく後るれど清水谷の桜の隧道がある。吉

野嵐山の花に縁なき自分等に対しては、これは／＼と驚くまでならずとも、何とはなしに春に接した心地がするので有る。

舞ふ花の行衛見て居る車掌哉

## 231 向島百花園を襲つた大洪水と再興の努力

『墨東歳時記―江戸下町の生活と行事』

今川榮 著

昭和四十九年 (一九七四)

関連図版 82

四十三年の洪水は百花園に手痛い打撃を与えた。むしろ百花園をして再起不能ならしめたといつて差支えない。園内は五尺から六尺の浸水で、それが一月以上も減かなかった。すべての草木は枯れてしまつて、生き残つたのは、あるもかいのないくだらない草木ばかりであつた。四代鞠場平兵衛と五代鞠場たるべき長男梅吉とは、額を集めて善後策を講じた。廃業の案も出たが、平兵衛の妻となつていた家付娘のおふちが強硬に反対した結果、資金を借入れて再建ということに決つた。しかし、大正と世も變つて、向島が、東京から日帰り行楽地であつたお株は箱根、熱海に取つて代られていた。だから百花園は復興したもの、昔日の繁栄は再び見られなくなつた。当時平兵衛父子は毎日十円という利息に追われていた。中学の先生の月給が四十円という時代であつたから、容易な金高ではなかった。この窮状を見かねて救つてくれたのが、石油の小倉常吉であつた。債務のすべてを処理してくれた小倉常吉と、苦しい所を助

けられた佐原平兵衛との間には、一種の紳士協約が成立し、佐原家は、小倉家に土地所有権を移譲する、小倉家は、百花園を昔の姿に保存し、佐原家の園内における居住権と営業権を確認するという約束が取替された。

小倉常吉の助けを得て百花園が再興に努力していたころ、梅屋敷の美観を再現しようとして、梅移し会という試みを再三回行ったことがある。趣旨に賛成してやって来た会員は、入口で梅の若木を手渡され、それを園内の好みの場所に植付けるという趣向で、初代鞠場の例に慣ったものであったが、植えられた梅樹が、どれも一握りに満たない稚木<sup>わかぎ</sup>で、またそんな細い苗木でなければ、安い会費でまかない切れなかったのもあろうが、それに第一次世界大戦の余波で、江東の地が工業地域に生まれ変わりつゝある時で、急にふえた煙突のため、せつかくの梅の木も、植えるそばから枯れてしまつて、ついにそのまゝ梅移し会も立消えとなり、百花園と梅との縁も切れてしまったのである。(後略)

### 第三節 海外との交流と園芸文化の輸出入

#### 232 イギリスに送ったアオキの雄木

##### アオキの雄木

アオキの新種があつたが、それは英国種の斑入り<sup>ふい</sup>ではなく、光沢のある濃緑の葉を持つていて、森の日蔭や生垣でよく目についた。

これはすでに英国にも輸入されているので、立派な常緑灌木として観賞されるだろう。そして冬から春にかけて、英国種のホーリー・ベリーによく似た、オリーブと同じくらいの大さきの漿果<sup>しやうか</sup>が沢山実る。

私の訪日の目的の一つは、イギリスの在来品種のアオキの雌木のために、雄木の品種を手に入れることであつた。これは恐らく、イギリス人が所有するものとしては、最も耐寒性で、有用な外来種の常緑灌木である。この植物は英国の厳冬にも寒害はなく、またロンドンのスモッグの中でも、他の植物よりもよく生育する。だから公園や街の広場やロンドン市民の家の庭にも、どこにでも見られる非常に普遍的な植物の一つである。しかし英国では、私が日本で見たように、この木に深紅色の果実がいっぱい実っているのを見た者は、一人もない。

『幕末日本探訪記―江戸と北京―』  
ロバート・フォーチュン 著  
文久三年（一八六三）  
関連図版 83

この木は雄花と雌花が、それぞれ別株を持つ植物の部類に属している。非常に珍しいことだが、ヨーロッパ産の本植物はみんな雌木で、従って果実不在なのである。私は日本に到着すると間もなく、この興味深い品種の雄木を探した。そしてやっと横浜のホール氏の庭で発見したのである。ホール氏は非常に有益な日本植物のコレクションを持つていたので、私は彼から多くの貴重な情報や援助を受けることができた。こうして得たアオキの雄木を、ワード氏の箱でイギリスに送ったが、無事に着いて、バクシヨットのスタンディッシュ氏の苗圃で栽培されている。私は非常な興味をもって、この植物の移植の結果を楽しみに待っている。読者諸氏も、イギリスの冬から春を通して、深紅色の実をいっぱい付けたこの植物が、われわれの家の窓や庭を飾る情景を想像されたい。そのような結果の現われは、私がイギリスからはるばる日本に旅行しただけの価値があると思う。

### 233 江戸からテムズ河へ荒海を渡る植物の輸送は実に至難

『幕末日本探訪記―江戸と北京―』  
ロバート・フォーチュン 著  
文久三年（一八六三）  
関連図版83

私のリストに新種追加

その他、私の注意をうながす種属は、ヨーロッパでよく知られているアオキである。イギリスでは変化に富むまだら色の日本種のア

オキを知るのみである。それはイギリスの気候にも申し分のない耐寒性であるから、イギリスでは最も有用な常緑樹の一つになっている。しかも英国産の灌木も育たない大都市のスモッグの中でも、日本のアオキは繁茂する。私は江戸の近傍の森の木蔭で、偶然、日本のアオキの本当の種類を見付けた。もちろん、イギリスの庭にある葉に斑のあるアオキは、その日本種の唯一の変種であることは疑われない。この種のアオキは、つやつやした緑の葉が美しく光って、冬から春の間にかわいらしい赤い漿果が鈴なりになる。江戸近辺の森の中のアオキは、まことに「日本の西洋ヒイラギ」である。私はこの植物で造った、実に装飾的な生垣を何度も見た。森の中には、斑入りの痕跡をかすかに残すものや、イギリスの庭で見つけたアオキのように、斑入りが酷似しているものなど、アオキの雄木と雌木のおびただしい種類があった。

これらの野生のアオキのほかに、鮮明で美しい斑入りの園芸種を、私のコレクションに加えた。イギリスの一般の庭で見られるアオキの雌木については、三章で述べた。付け加えると、イギリスにはない、非常に美しく興味のある、有益なアオキの雄木を輸入できたら、イギリスの冬から春にかけて、真赤な実をつけたアオキを期待できそうだ。

そのとき一緒に手に入れた、多数の興味のありそうな品種をコレクションに収めた。以上のコレクションは、江戸とその付近で、いかに肥沃な土地で選択したかを証明するに足る優良品種である。私が報告したコレクションの目録を誰かが見たら、島国日本の楽しい森林風景の話も聞いて、誰ひとり驚きはしないだろう。私はこれ

まで日本の風景をそのような消極的な考えで伝えようと骨を折ったが、今度は日本の風景を引き立たせている樹木や灌木を、積極的にヨーロッパやアメリカへ運ぶ私の目的を果たさねばならなかった。

だが、欧米へ植物を移す仕事は容易な事柄ではなかった。イギリスから日本へ送るのは楽であったが……。ところで日本のロマンチックな谷間や起伏する丘陵を、仲間と歩きまわったのは全く愉快であった。江戸で採集した時には、武装した警護者が随伴したとはいえ、いやなことではなかった。それどころか、既述したように、優秀なコレクションと一緒に探してもらったことは、非常に快適であった。しかし、植物を枯らさずに、江戸からチームズ河へ、およそ一万六〇〇マイルも離れた荒海を渡って輸送するのは、じつに至難なことであった。

## 234 シーボルトとフォーチュンの交流

『幕末日本探訪記―江戸と北京』  
ロバート・フォーチュン 著  
文久三年（一八六三）

### シーボルトの居宅

長崎から数マイル離れた景勝の丘の上に、優れた自然科学者であるシーボルト博士ドイツ生れの医学者、博物学者。一八二三年、オランダ商館に就いた。一八五九年、三十年ぶりに再び来朝。著書に『日本』が住んでいた。『日本動物誌』『日本植物誌』など。一七九六―一八六六

鳴滝の彼の住居は他の外国人の家とは少し離れていたが、彼の楽しみは、彼の庭や書斎に、彼の友人である日本人の人々を迎えること

あったようだ。

（中略）彼はちょうど在宅で、大変親切に迎えてくれた。彼の家は上等な日本建築で、仕事場や書斎に案内された。そこには彼の専攻の博物学に関する、日本各地での研究資料が収集されていた。けれども私が特に心を惹かれたのは、その庭であった。

家の周囲には家と同程度の小規模の植物園があつて、各地から集めたり、繁殖させた新種の植物が、ヨーロッパに送るために準備されていた。ここで私は、シーボルト博士の大作『日本植物誌』の中に描写された、植物図の大部分の実物を見た。この本は、東洋植物の愛好者にあまねく知られている。植物園には、この本の記載のほかに、新しい植物も幾種類かあった。

特に葉に白い斑入りのアオキ（*Aucuba*）の新種が目立っていた。それから雄のアオキ（*A. japonica*）、種々の針葉樹、たとえば、アスナロ（*Thuopsis dolabrata*）、ロウヤヤキ（*Sciadopitys verticillata*）、サワラ（*Retinospora pisifera*）、ヒノキ（*R. obtusa*）、その他、興味深い種類が沢山あった。斑入りの植物も多数あったが、みな大変美しかった。その中で、コノテカシワ（*Thujas*）、グニ（*Eleagnus*）、杜松（*Junipers*）、竹、トキ（*Podocarpus*）、シズキ（*Camellias*）、ヒサカキ（*Eurys*）などをあげておく。

シーボルト博士は収集を広げるために、家の背後の丘にある草むらを開墾して整地したり、異種の植物を栽培するために、適当な土地を入手した。さらに特殊な植物の必要に応じて、高台に湿地や日陰の場所を作った。こうした彼自身の楽しみのためにも、彼の開明した研究のためにも、長生きしてほしいものである。（後略）

## 235 菊の変種の購入

『幕末日本探訪記―江戸と北京―』

ロバート・フォーチュン 著

文久三年（一八六三）

## 浅草寺と花園

（中略）ここは江戸の近くで、多種類の美しい菊で有名である。われわれが訪ねた時は花は満開であった。イギリスの花屋はきつと、ハンマースミス寺院や、ストーク・ニューウイントンから、はるばる浅草寺の菊の花を見に来て、どんなに目を楽しませたいことだろう。

私は形も色も特種で実にすばらしく、イギリスで現在知られた、どんな種類とも全く異った品種をいくつか手に入れた。ひとつは、赤色の長い花弁が毛髪のように咲き乱れて、黄色の花蕊がシヨールやカーテンの房のように見える。ほかのは広くて白い花弁に赤い線が入って、カーネーションかツバキのようであった。別のは大形で光沢のある色彩が目立っていた。もしも私が引きつづき、これらの変種をヨーロッパに紹介することができたならば、私が以前手掛けた「慎しみ深い」「花ことば」ヒナギクが、ポンポン咲き菊（イギリスで成功した最高の品種改良）の原植物になったように、菊もちじむしい変化を生じるかも知れない。

私は確実に最も優良な品種を手に入れるために、私が訪ねた時に満開の菊の匍枝を取ることに決め、さらにその匍枝を、自分で注意して持ち帰ることにした。多少手間取ったが値段がまとまったの

で、私は植木屋に、買った菊をその場で掘り出したい、という私の希望を話した。ところが植木屋は、彼のためではなく、ただ私のためという理由で、ひどく反対した。私が植木を運ぶのは迷惑だろうから、彼が明朝間違いなく、私の望み通りの菊を掘って、公使館へ持参する、と彼は言った。その男は、私を欺して、私が買ったものと違った、粗悪な植木を持って行こう、と思ったのではなからうが、私はシナで、この手で一度ならず二度も欺されたので、再び欺されまいと決心した。そこで彼の好意に対して厚く礼を述べてから、私は自分で匍枝を取らせてもらって、自分で保護して持ち帰った。

日本の園芸家は、菊作りの技術にかけては、われわれよりも大分うわ手で、不思議に大輪の花を咲かせる。が、その世話が大変なもので、良質の土壌と、そして一本の茎にわずかに一輪か二輪の花を咲かせることに成功している。（後略）

## 236 ワード氏の保護箱で海外へ植物を運ぶ

『幕末日本探訪記―江戸と北京―』

ロバート・フォーチュン 著

文久三年（一八六三）

## ワード氏の保護箱

しかし、ありがたいことには、旧友ワード氏が、彼の名をつけた有名な硝子箱のおかげで、困難を克服することができた。ワード氏の箱のおかげで、イギリスの公園や庭を、異国の美しい植物で豊富にしている。このすぐれた発明がなければ、原産地の植物は、それ

らの自国以外では見られなかったであろう。日本の大工はワード氏の箱の製造を請負って、箱の枠組は作れたが、硝子をはめ込むことが会得<sup>えとく</sup>できなかった。横浜に居留していたオランダの大工が硝子作業を引受けたが、残念なことに彼の硝子切りが折れて、他の硝子を切ることが不可能になった。しかし、運よく、ついにこの至難な箱づくりが完成した。そして箱に収集品を思う存分多量に詰めて、シナへ送る用意をした。

ちょうど英国汽船イングラランド号（船長ダンドス）が折返し上海へ戻ろうとしていた。当時まだ日本から直接にイギリスへ輸送する船便がなかったため、私がこの機会を利用して、収集品と一緒に上海へ渡ったのは、そこから本国へ船積みするためであった。ベイチ氏もやはり彼の植物を同じ汽船の甲板に積み込んだので、その結果、船尾全体に、日本産植物をいっぱい詰め込んだ硝子箱が並んだ。いまだかつて、そのような興味のある貴重な植物コレクションが、汽船の甲板を占領したことはなかったろう。私は熱誠こめて、最愛の植物が都合よく、静かな風、穏やかな海、そして海水がかからぬよう、植物の組織を痛めつけない、いやな気象状況を、できるだけ避けられるように望んだ。

## 237 イギリスへ植物を持ち帰る困難

### 奇妙な小温室

根のある植物や別の目的で集めた博物のコレクションはおびただしく、かつ貴重なそれらをすべて整理し、包装しなければならなかった。私はそれらを自分自身で、シナへ持つて行くことに決めた。季節風が南方から強く吹いていたので、標本類をイギリス本国に直接輸送するのは早過ぎたからであった。日本の大工が造ってくれた数個のワード氏の箱に土を詰めて、日本産の珍しく美しい樹木や灌木類<sup>ぼく</sup>の標本をたくさん植え込んだ。その植込みの作業中、神奈川の住人が多勢訪ねて来て、私の手法をすこぶる好奇と興味をもって眺めていた。彼らはかつて、そのように奇妙な小型の温室を見たことがなかったため、長い航海中の植物の処置に関して、いろいろ質問をした。そこで私は、四、五カ月も海上にある長い期間中、植物に一度も水をやらないこと、ワード氏の箱はシナを出航してからイギリスに着くまで決して開けないことなどを話したら、彼らは不思議がって、信じられない様子であった。彼らが納得できないのも無理からぬことで、この取るに足らぬ事実を頭を悩ましたのは、余人ならぬ、この道に明るい園芸家たちだったのだから……。 (後略)

『幕末日本探訪記―江戸と北京―』  
ロバート・フォーチュン 著  
文久三年（一八六三）

238 プラントハンターの旅立ち

『幕末日本探訪記―江戸と北京』  
ロバート・フォーチュン 著  
文久三年（一八六三）

日本の調査を終えて  
時はちやうど七月の終わりで、この地方の花の様子にも大きな変化が起こっていた。アジサイ、タチアオイ、フヨウや道ばたの多少の雑草のほかは、盛りの花はほとんど見られなかった。在来のアジサイは、日本では大きく繁茂するので、開花期には美麗な外観がひととき目立つ。

私はその頃、日本でなすべき目的を果たしていた。私は注意深く、日本の秋、冬、春、夏に各地を調査して、イギリスの気候に適するような珍しい品種や観賞植物を探し求めた。また昆虫や陸の貝類の大量のコレクションをつくったり、余暇には典型的な芸術作品、とりわけ、以前からヨーロッパで有名な古代の漆器を手に入れようと骨を折った。日本の農業は、段々畑や平野の作物、雨期や乾燥期の作物などについても、注意してそれぞれの時期に調査し、時どき本国の新聞に詳細に寄稿した。

このような仕事をしている間に、あらゆる階級の人々とよく接触して、彼らの日常生活の風俗習慣を観察する機会を得た。すでに日本の政治形体や列強との関係、外国貿易の予想など、すべてにわたって検討した。そして独自の結論を得ることができた。これらが私が計画した仕事で、今までのところでは好結果に終わろうとして

いる。

239 東京近郊主要植木商に横浜輸出商の拡がりを見る

「東花植木師高名鏡」  
梅若吉邦 著  
明治九年（一八七六）  
図版 85

東花植木師高名鏡

花 園 樹 齊			
東両国横網一・香樹園	鈴木 孫 八	浅草奥山	森 田 六 三 郎
芝丸山	内山平右エ門	永田町一丁目	諏訪銀出張幸次郎
市ヶ谷砂土原町・秀野園	伊東八十次郎	横浜野毛・四時皆宜園	川 本 友 吉
向島白髭・梅花園	佐 原 平 平	溜池天神山・西花園	内 山 卯 之 吉
目黒太鼓橋	野村辰五郎	市谷富久町	錦香園 松五郎
麻布広尾・咲花園	田中定治郎	川口町	長 澤 太 吉

師 庭						師 物 替					
下谷金杉根岸	飯田町九段坂	下谷金杉根岸	深川扇橋	同 所	外神田秋葉社内	神田今川町	芝烏森町	本所三笠町	向島寺島	築地一丁目	同 采女橋
内田佐平次	針ヶ谷長吉	柿沼喜三郎	小川九兵衛	大塚条次郎	外山重吉	小澤源兵衛	辻岡半次郎	西川喜太郎	萩原平作	荒澤虎松	保坂金次郎
											三木屋新助
											篠吉五郎
											浅井梅次郎
											佐野惣十郎松
											中村孫太郎
											松永喜三郎
											中山銀藏
											松下惣次郎
											千駄木林町

師 物 替						師 物 鉢					
同 所	同 所	上駒込染井	本所小梅	本所林町三	駒込内海	小石川	駒込動坂	根 岸	根 岸	牛込築地町	赤城社内
名倉要助	川 寫彦治郎	谷 銀 藏	深谷入藤	田中久太郎	栗原政太郎	長谷川幸太郎	河村伊三郎	星野榮吉	宇田川文蔵	甲田幸太郎	渡辺清兵衛
											富岡辰五郎
											笹山大吉
											中埜半次郎
											関口萬次郎
											樹高 愛宿下佐久間丁
											青山立石
											向島秋葉社内
											駒込染井
											駒込染井
											千駄木林町
											石幡平次郎

師物鉢木地															師 物 鉢				
同 所	本所四ツ目	同 所	根岸杉崎	向島請地	横浜山元町	同 所	横浜石川町四丁目	同 所	駒込染井	同 所	駒込伝中	巢鴨二丁目	同 所	同 所	向島請地	駒込染井	巢鴨仲町	駒込内海	小石川原町
和田三之助	成家文蔵	滝澤平右エ門	高橋浪吉	岩田新助	須田定次郎	廣瀬常吉	岩月小三郎	同重兵衛	伊東留次郎	同喜兵衛	高木孫右エ門	内山柳之吉	同市五郎	同權次郎	小宮市右エ門	曾我權右エ門	鈴木政吉	柏木吉三郎	笹山助次郎

				敷 屋 梅	師物鉢木地														
同所表門前	目 黒	さぼてん 坂本入谷	地木師 駒込染井	根岸 万年青師	堀ノ内道中程	四ツ谷新町	巢鴨一丁目	上田端村	亀井戸村	駒込藪下	麻布三軒家	同所二丁目	巢鴨三丁目	同 所	麻布広尾	新町つのはず	下駒込	駒込伝仲	千駄木林町
大國屋 佐兵衛	橋和屋善右エ門	成田屋 留次郎	伊東小右エ門	肴舎常五郎	横田勘右エ門	大坂屋三吉	香山久吉	神田半三郎	安藤喜右エ門	清水藤吉	菅根吉五郎	斎田弥三郎	大川所左エ門	高田鉄五郎	谷崎菊五郎	古川兼吉	稲垣松五郎	森下繁次郎	高橋直次郎

地 木 師	
横浜山元町	高橋久藏
高田下戸塚	松村久左エ門
同上戸塚	野村虎藏
柏木鳴子町	深野喜四郎
柏木村	原鍋次郎
千駄ヶ谷 二	横倉兼次郎
向島請地村	滝澤八十右エ門
同所	三ツ橋清右エ門
同所	同茂兵衛
同所	滝澤八右エ門
同所	小宮利右エ門
西大久保	松本梅吉
同所	矢羽瀬松五郎
赤坂氷川町	西村喜三郎
同所	大庭忠治郎
麻布桜田町	林田豊吉
日ぐらし	松本新右エ門
下田端	剣持安五郎
日ぐらし	野口元三郎
上田端	清水友吉

根上り松	駒込藪下	玉川太郎吉
石菖	駒込染井	石菖師 条藏
ばら	赤城明神下	薔薇園 吉見
横浜山元町・地木鉢物	飯 寫秋三郎	
高田諏訪・地木師	蛭川銀次郎	
駒込染井・地木鉢物	伊東金五郎	
上田端・地木師	宮本 条吉	
巢鴨二丁目・万植木	内山長太郎	

明治九年八月新版

東京本郷老丁目四番地  
版元 梅若吉邦 著

240 百合輸出増加に伴い、名称の問い頻繁にしてこの画幅を作る

「百合花選自序」  
横浜植木株式会社 編  
明治二十七年（一八九四）

百合花選自序

百合ハ我邦の名花にして園芸上欠くへからざる逸品として欧米人に  
愛賞せらるゝこと昔ならず、高さ尺許のものあり、四五尺許のもの  
あり、春開くものあり、夏開くものあり、秋開くものあり、其花蓋  
たる真立天に向ふあり、垂曲地向ふあり、傾斜側向するあり、或

ハ開展し或ハ反卷するあり、其色たる白あり、紅あり、黄あり、朱紅なるあり、黄赤なるあり、或紅斑、或黄道、或紅暈を帯ひ、或刺毛様点を呈し、其葉や或卵円披針状をなし、或細長披針形をなし、有柄あり、無柄あり、密生あり、疎生あり、輪様に生するあり、辺縁白色なるあり、又花に佳香を放つあり、葉腋に珠芽を生するあり、茎梢分叉するものあり、否らざるものあり、同一品にても或産地により或培養により花色葉状に差異あるを以て其品種極めて多く、是を以て欧米人近時観賞の嗜好一に此花に鐘ると云も過言にあらずなり、弊会社爰に見るあり、世間に率先して力を百合輸出に傾尽せしより比年之か培養繁殖に従事するもの益多く随て輸出額年一年より増加し地方の之に従事せんとするの諸士より其品類名称の来問頻繁に<sup>(註)</sup>して一々之か応答をなすハ其煩勞に堪へざるのミならず筆答口述ハ形色を尽さるる所あるにより今や其花の著名なる者新種なるもの三十六品を選出し実物に就て描写し彩色を施し名称を附し該花愛好の士をして一見以て其品名形色を知得せしめ併て応答の煩勞を省かんと欲し此画幅を作る、爰に洩したるものハ他日補修せんことを期すと云ふ

時維明治二十七年十一月天長地久之佳辰

横浜植木株式会社

## 241 山百合、海外輸出の一品たり

『明治十年内国勸業博覧会審査評語』2

内国勸業博覧会事務局編

明治十年(一八七七)

神奈川県

褒状 山百合

相模国鎌倉 鈴木市左衛門  
郡和泉村

球根肥大ニシテ価頗ル廉ナリ、園庭ニ栽テ観ヲナスベク、又近時海外輸出ノ一品タリ、其益尠シトセズ

## 242 海外の園芸家のための日本朝顔栽培の手引き

『日本朝顔栽培の手引き』

A Guide for Cultivators of the Japanese Morning Glory

新倉省三著

明治二十七年(一八九四)

図版88

日本朝顔の栽培者のための手引き

I. はじめに

(1) 日本朝顔には二百以上の種類がある。夏の晴れた朝、空気がまだ涼しく瑞々しく、露が葉を濡らしているうちに、光り輝く朝顔の花をくまなく見まわしながら鑑賞するのは、なんと楽しいひとときであらうか！

(2) この美しい花は、太古の昔から日本で広く愛でられ、詩歌や美

術の題材となってきた。この花の多くの種類は何年も昔に「朝顔画譜」に描かれていた。しかしながら、この画譜に含まれていない最近の種類もいくつかある。

(3) このうえなく賞賛されるように朝顔を育てる最良の方法は、その成長を3〜4フィートの高さまでに制限することである。

(4) アサガオの価値は、色の華麗さ、花びらの大きさ、形の特徴という3つの条件に基づく。したがって、花屋はこれらを改善すべく努力している。(後略)

# A GUIDE FOR CULTIVATORS OF THE Japanese Morning Glory.

## CONTENTS.

I. INTRODUCTION .....	PAGE 2
II. GENERAL REMARKS .....	3
III. GROWING IN POTS .....	5
IV. GROWING IN THE OPEN GROUND .....	7

ROKUMONYA,  
5, SAKAI-CHO, NIHOMBASHI-KU,  
TOKYO

## A GUIDE FOR CULTIVATORS OF THE JAPANESE MORNING GLORY

### I. Introduction

(1). Of the Japanese Morning Glory, over two hundred varieties can be counted. On a bright summer morning, while the air is still cool and fresh, and the dew is still on the leaves, how pleasant it is to glance around and view the brilliant flowers high and low!

(2). These lovely flowers have from ancient times been universal favorites in Japan,

and formed the subject of poems and the fine arts. Though many varieties of this flower were illustrated many years ago in the "Asagao Gwafu," yet there are some recent varieties which were not contained in that work.

- (3). The best method of cultivating morning glories, so that they will be most admired, is to limit their growth to three or four feet high.
- (4). The value of the morning glory depends upon three conditions, brilliancy of color, size of petal, and peculiarity of form, and, therefore, florists are endeavoring to improve these.

## II. General Remarks

- (5). To raise the morning glory, sow seeds in flower pots or in the open ground. Sometimes, new varieties of color and shape are produced, - a natural result of botanical action.
- (6). The morning glory is a parasitical plant like the ivy, and requires plenty of manure, moisture, and sunshine, for without these, the flowers are not so brilliant in color.
- (7). Morning glories twine around slender sticks, turning from left to right. These slender sticks are necessary to support to plant.
- (8). The soil in which the seeds are to be sown should be prepared in winter by mixing plenty of manure with it. The manure should consist of fish from which oil has been pressed, dried and powdered fish free from salt, and bone dust.
- (9). In a climate similar to that of Tokyo, the seeds may be sown from 10th. April to 10th. May.
- (10). The supports, which must be of vegetable material, should be the thickness of a penholder, three or four feet in height for pots, and five or six feet for the open ground. The Japanese use slender bamboos for supports.
- (11). Pinch off the flowers and throw them away before noon every day. Otherwise the succeeding flowers will not be large and handsome. But, if the cultivator wishes to preserve seeds, let a few of the flowers which blossomed ten days after the first ones remain on the plant to ripen.
- (12). Gather the seeds of morning glories when they seem quite ripe and ready to fall on the ground.
- (13). If the foliage becomes so dense as to keep the sunshine from the stems, the small branches may be cut off without detriment to the plant.
- (14). There are two methods of cultivating the morning glory, one is in pots, and the other in the open garden.

## III. Growing in Pots.

- (15). Well pulverize the soil which was prepared in winter, fill the pots with it and sow the seeds. Each plant requires a square foot of ground.
- (16). After the seeds are sown, water twice or thrice every day, and place the pot in a sunny place. There need be no fear of overwatering them, as the surplus water escapes through the holes in the bottom, if the soil has been placed properly in the pot so as to permit free drainage.
- (17). When the plant has attained five or six inches high, pinch off the leading bud, so that new branches may grow.
- (18). At this time, construct the support around the plant, which may be made in various

forms, as column, house, triangle, according to the person's fancy, then, the new branches will soon twine around it.

(19). When the support is made, as soon as the branches have grown six or seven inches, pinch off the foremost buds, and let the stems twine all over the support.

(20). Following the natural tendency of the plant, assist the stems to twine round the support, but be careful not to turn them the wrong way.

(21). When the plants have commenced to blossom, do not allow the surface of the soil to be come dry, but give water every day.

(22). The flower of the morning glory is about four inches in diameter, and in rare cases five or six inches.

(23). Early in the morning, the pots may be brought into the room for ornament, and to be admired, but they must be returned to a sunny place from noon till the next morning.

#### IV. Growing in the open ground.

(24). In the garden, morning glories may be grown either tall, or dwarfed, as in pots.

(25). To make these plants bloom at a great height is not impossible, but this is contrary to their nature.

(26). To grow in the open ground, the soil should be dug at least one foot deep, and manure, prepared as before directed, well mixed with the earth.

(27). After pulverizing the soil, and mixing the manure, plant the seeds.

(28). In order to obtain a large number of flowers at a height of five or six feet, the leading buds must be pinched off, but beyond that height this is not necessary.

(29). Construct the support near the plant, either in the form of an arch or a lattice.

(30). Each plant should be allowed a space of ground fifteen inches square, and the supports must be in one straight line, like a fence. If more than one row be made, the flowers cannot be seen, and the sun can not penetrate the foliage.

(31). Allow no weeds to grow near the plants to prevent the sun from reaching the roots.

(32). Give water once a day, using judgement as to quantity in wet and dry weather.

THE END

明治廿七年十一月廿七日印刷

明治廿七年十一月三十日發行

著者兼發行者

新倉省三

東京市日本橋区堺町五番地

印刷者

野村宗十郎

東京市京橋区築地一丁目二十番地

印刷所

株式  
会社 東京築地活版製造所

東京市京橋区築地二丁目十七番地

TWENTY VARIETIES OF THE SEEDS  
OF THE  
JAPANESE MORNING GLORY.

- No. 1. Pure-white.  
No. 2. " " †  
No. 3. " " , gray-spotted.  
No. 4. " " , blue-spotted.  
No. 5. Light-gray. ‡  
No. 6. Dove-color. \* †  
No. 7. Pink.  
No. 8. Dark-pink.  
No. 9. Scarlet.  
No. 10. " †  
No. 11. " \*  
No. 12. " \* †  
No. 13. " five-petaled. \*  
No. 14. Light-ochre. ‡  
No. 15. Deep-purple.  
No. 16. " " \*  
No. 17. " " †  
No. 18. Blue.  
No. 19. " \*  
No. 20. Water-green. \*

\*White bordered. †Folded. ‡Screw Shape.

*Price one dollar of gold.*

ROKUMONYA,  
5, Sakai-cho, Nihombashiku, TOKYO

243 パリ万国博覧会、盆栽の草花、縦覧の人皆珍らしく思えり

『仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書』 1

仏国博覧会事務局 編

明治十三年（一八八〇）

○第七章 物品ノ審査並評論之事

（中略）

第八十六八両小区

本区ノ粧飾草花及ヒ菓樹等頗ル好評アリ、皆遠ク本邦ヨリ齎セシモノニテ航海中印度ノ熱度ニモ死セス、依然トシテ奇種異類ノモノ多シ、審査ノ時甚タ称讃シタリ、殊ニ植物学者ニハ有益ナリシトテ喜ヒタル人多シ、盆栽ノ草花百合花柿ノ如キハ縦覧ノ人モ皆珍ラシク思ヘリ、本区ニハ名誉賞状二ツト金銀牌各一ツヲ得タリ（後略）

244 パリ万国博覧会、出品の内訳、園芸多く占める

『仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書』 1

仏国博覧会事務局 編

明治十三年（一八八〇）

○第二章 出品人及ヒ物品之事

（中略）

物品ノ数ハ区分ニ随ヒ其惣数ヲ挙クルコト左ノ如シ

一大区 美術

無

二大区 教育及ヒ其用具方法等

一、五二二個

三大区 家具及ヒ附屬品

二五、一五八

四大区	織物衣服及附属品	一一、〇四三
五大区	採掘工業及原品製造品	一、五五一
六大区	機械工業及器具製造法	七
七大区	食品食用	二、〇四一
八大区	農業及ヒ養魚法	一八
九大区	園芸	三、九八六

## 245 我が国の植物を外国へ輸出して進んで国益を計ること

「大日本園芸会第壹総会に於て  
子爵榎本武揚君演説」  
『国民演説』第4号  
明治二十三年（二八九〇）

大日本園芸会第壹総会に於て

（明治廿三年三月八日）  
子爵榎本武揚君演説

本会の主意や或は効用の仔細園丁家の用ゆる種々の機械の説明の如きは只今精しき演説が有りましたが、是は誠に何うも園丁に従事して居られる、諸君に取て大層利益の有る事と思ひます。

ソコで今日此の座に列せられる諸君は、或は学術も有り或は実地の経験にも富んで居られる処の、熟達者の方々で有ります、それは私の如き素人が一場の演説を致すのは、実に嗚呼敷い訳で御座います、本会から達て御勧めで黙止難き所から聊か一言を演べまして其責を塞ぐ丈で御座いますから、大層利益の有る話などと見ては違ひます、前以て此事はお断り致します。

凡そ宇内を旅行するに、花草を愛玩するの民は以て其優しき民たるを卜知し得べしとは、西洋人の常套で御座いますが、是は實際で野蛮時代の民杯は縦令珍らしい花や異つた草杯か有つても、之に意を注ぐ程精神の発達した人民は御座いません、然し開化文明の国に往けば正しく是れに反対して居ります。

抑も宇宙間の森羅万象の顕象は、智識と経験とを以て其理を研究して、以て天地化育を補け之が改良を計かるは、我々人類社会の一つの義務と申して宜からうと思ひます。彼の珍禽奇獣は各々国に依て其趣きを異にするのみならず、物理研究の社会にとつては、誠に欠くべからざるもので、之に依て一国の開否を知る位のものであるから、彼の三年間我家の洒掃を仕なかつたと云ふ、董仲舒の様な無性者は園芸家の到底共に語るに足らざる者であります、私は正しく園芸会の賛成者で本会の益盛ならん事を希望致して居ります一人で御座います。ソシて此の日本園芸会は、啻に植物を学理的に研究するばかりが目的ではなく、我国の植物を外国へ輸出して、進んで国益を計る一端を以て、自から任する者で有らうと思ひます。然る上は内外の植物を交換し、互に人民の好み嗜みまする好嗜を利用する事を審らかにするのが、本会に取て最も肝要の事であると思ひます。欧米諸国に於ける園芸上に関する有様は暫く措きまして、私は先年北京に駐在して居りましたが、（支那の都会の北京です）折節支那の北東の植物と、其の人民の好み嗜みまする処を親しく見まして感じた事が御座います。依て爰に一二の例を挙げますれば、皆様御承知の事は知れませんが、彼の直隸洲に近き支那の山東は至つて牡丹の名所で御座いまして、彼の趙紅魏紫杯と云ふて趙氏の庭には紅

いの牡丹があり魏<sup>ぎ</sup>氏の庭には紫<sup>むらさ</sup>きの牡丹が有り、又緑<sup>りよく</sup>色や黄<sup>こう</sup>色や黒色の者も有ります。私は宮内省の命に依て黄色の牡丹を十二株程持て帰て来ましたか、不幸にして皆ナ枯<sup>か</sup>れて仕舞いました。然るに昨年更に黄色のと、黒色のと、紫色のと、緑色のと、此の四種を天津の領事の波多野と云ふ人に貰<sup>もら</sup>ひまして、是は只今でも私の別荘に植え置いて有りますが、既に蓄<sup>つほみ</sup>を二つも生じたのがあります。我國の牡丹も古より支那に譲ずらん様で御座いますが、然し右の様に黒色や黄色や紫や緑杯の種類の分かつたのは今迄は無い様で御座います。愈々無いとなれば此の通りの牡丹を取り寄せるのは、至つて容易な事で天津航海の郵船会社の船に托して、天津の植木屋に注文すれば直様得られます。

又五月頃北京の縁<sup>えん</sup>日に植木鉢に植えて居りました物の直段を聞いて見ましたら、詰らん霧島<sup>きりしま</sup>でありながら直段の二三円もしたには、実に驚きました。是は南方から取り寄せる故に斯様に高いと言ふて居りましたが、此の如く支那に於ては日本で二三銭の物が三四円も致します、又蘭の類は支那の北方に於ては、我國に較<sup>くら</sup>べると数倍も直段が高い、其の变りに彼の、武枝柑<sup>ぶしかん</sup>の類は我邦の物に比して余程安い、自分が買って覚<sup>さと</sup>が有りますが、譬<sup>たと</sup>へば高さ四五尺も有り幹の余程太い、実が三四十もなつて居る物が、七八円から十円位迄で有ります。又嘗<sup>かつ</sup>て極寒中に高さ四五尺の誠に見事に咲て居る柘榴<sup>ざくろ</sup>を一对<sup>いっ</sup>三円で買ひましたが、中々日本では右様の直段では買ふ事は出来ない、其れ已みならず、斯様な木は無いと思ひます。又当節は……：最う一ヶ月斗り前は老梅<sup>らうばい</sup>の見事な者が大分縁日杯にも出て居りますが、我邦の様に紅白の梅杯は至て尠ない、且つ臘梅はあるが桜は一

本も無い様です、又菊も我邦の物よりはズート劣<sup>おと</sup>る様に思はれます、只詰らん物かは知れないが、菜<sup>よもぎ</sup>の種類が有ります、(我國の名は知りませんが、蓬萊の菜の字ださうです)日本にも幾らもあります。又先年魯西亜に参つて居つた時分に、(爰に御出でなさる花房君も御一処で御座いましたが)尋常一様の庭に黄色の花菖蒲が咲て居るのを見ましたが、彼国<sup>かの</sup>に於ては珍<sup>めづ</sup>しくない者と見へ、別段珍しがる様ではなかつた。又諸君御承知の通り英吉利では黒い色の百合の花は、沢山金子を出して買ふと云ふ話で御座いますが、我北海道にも殆んど黒色の百合の花が自然に咲て居ります。

或は西洋でも、或は日本でも至て珍重して利用する。薔薇<sup>ばら</sup>の油は価が至て高いが、是は何処<sup>どこ</sup>で出来るかと云へば、彼のボルガリヤの野生の薔薇<sup>ばら</sup>から製するので御座います。又魔島<sup>まじま</sup>の菊花油と云ふ者は、香水や石鹼<sup>しやげん</sup>杯に使て誠に好<sup>よ</sup>い香があり、且つ存外価が安い、此も魔島<sup>まじま</sup>の海辺<sup>うみべ</sup>の花から得るので有ります、彼の菊花油杯は彼国では見た事も聞いた事も無いが、是等は輸出<sup>ゆしゅつ</sup>の見込があるだらうと思ひます。近來私は南米利加のブラジルで、見事なる芍薬<sup>しやくやく</sup>が野に咲き乱れて居つたのを見ましたが、是は人の植たのではなく全く野生の者で有ります。今日欧羅巴人が大層珍重する、彼の「ハナジヨン」と云ふ草杯も其の元はブラジル国の産だそうで御座います。

此の如く此の種の元を篤<sup>とく</sup>と探索<sup>たんさく</sup>しますれば、我に有て別に珍重しない物も彼に取て大層貴重する事、或は彼に有て安価なる物も我に有ては高価なる事も有るに相違御座いません。

諸君定めし御承知で御座いませう、(名<sup>な</sup>わ忘れましたが)横浜に居た米人で元と開拓使に奉職して居つた人ですが、琉球の蘇鉄<sup>そてつ</sup>を欧米

諸国に送て、大辺金を儲た事が有ります、又彼の人は欧羅巴に竹を送たと云ふ事です、其の送り方は何うかと云へば、直接に聞いた話では、竹を切て根だけを箱の内に入れて、石膏を水にして流すと箱一面に固結から空氣が内に浸し入らない、故に其竹は枯れる様な事はなく、首尾能く遠方へ届いて是で大層利益を得ました。

何は兎もあれ是等百般の事を研究しますにも、只出鱈目に遣て見様では可けない、必ず學術と実業と並び行はれる様に仕なければ成りません。故に本会の如きは學術を以て此の会を奨励する者と、実業を以て奨励せられる者と、互に相提携して相補け合ふて、後來の目的を達せられん事を私は諸君に向て切に希望する処で御座います。

此の他別に私は演べる事は御座いませんが、終に臨で一言致します。夫れに仏蘭西の大博覽会に参て歸て來た人の話を聞くに、昨年の博覽会に日本から出品した人々は、皆相応の利益か有つたと云ふ事で御座いますが、独り此の園芸の一事に至ては、出品者は大損害を招いたと云ふ話である、然し是は止むを得ざる事で、皆な荷造の悪るかつた為めに、遠路の航海中或は毀はれ或は枯れ或は腐れ、終に首尾能く彼の国に完全に届いた者は尠なかつたと云ふのは、實に私は遺憾の至りに耐えませんでした。又先年魯西亜の園芸博覽会の開けた時も、我邦から色々の植物を送くられたが、是も前と同様の結果であつたと云ふ事で御座います。私の望む処は本会の力に依て、學術と実業と並び行はれて此後は前年の如き覆轍を踏まない様に、注意せられん事を偏に望みます。(完)